

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 473 集

十世 どう
杉の堂遺跡第 31 次調査・跡呂井遺跡発掘調査報告書
あとろい

国道 4 号水沢東バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

2006

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

杉の堂遺跡第31次調査・跡呂井遺跡発掘調査報告書

国道4号水沢東バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのござっております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれその土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところであります。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の事前の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、国道4号水沢東バイパス事業に関連して平成16年度に発掘調査された水沢市杉の堂31次調査と跡呂井遺跡の調査成果をまとめたものであります。杉の堂遺跡からは土器棺が、跡呂井遺跡からは大型の堅穴住居跡が中心に発見されました。その結果、両者とも集落の一部として構成されていたことが判明しています。

本書が広く活用され埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、(財)水沢市埋蔵文化財調査センターをはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

例　　言

- 1 本書は、岩手県水沢市東中通り2丁目ほかに所在する杉の堂遺跡第31次調査及び跡呂井遺跡において平成16年度に行われた埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は「国道4号水沢東バイパス建設事業」に伴う緊急発掘調査として行われた。
- 3 発掘調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託をうけて、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査に関わる調査期間・調査面積・調査時の略号は以下の通りである。

野外調査

杉の堂遺跡第31次　調査期間 平成16年8月19日～10月15日

調査面積 5,318m²

遺跡略号 SD-04

跡呂井遺跡　調査期間 平成16年8月19日～10月15日

調査面積 185m²

遺跡略号 ARI-04

整理作業

杉の堂遺跡第31次・跡呂井遺跡　期間 平成16年11月1日～平成17年3月31日

- 5 野外調査は川又晋と西澤正晴が担当した。整理作業及び本書の執筆は川又・西澤が担当し、編集は川又が行った。

- 6 発掘調査ならびに整理作業中には以下の方々・機関の協力・教示を得た。

佐藤良和、伊藤みどり、高橋千晶

水沢市教育委員会、(財)水沢市埋蔵文化財調査センター

- 7 遺物番号は種別にかかわらず連番とし、写真図版と対応している。

- 8 遺物実測図における表現方法は下記の通りである。内面に黒色処理が施されるものについては右半分にアミを掛けている。

- 9 本書で使用した遺構略号には以下のものがある。

S I 竪穴住居跡、SK土坑、P ピット（小穴）、SX 土器埋設遺構

なお、竪穴住居跡と呼称するものは竪穴建物跡とすべきであるが、慣例的にそれとする。

- 10 本書で表す北は座標北を示す。

- 11 本書で用いる座標値は旧座標（日本測地系）に準拠している。レベル高は海拔である。

- 12 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

- 13 遺構図版にみられるアミは焼土の範囲を示す。

- 14 出土遺物および調査に関わる諸記録は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

- 15 本書に関わる内容、その他記述はこれまで、一部報告・公表したことがあるが、差異があれば本書をもって優先する。なお、これまででは杉の堂30次調査と称していたが、杉の堂31次調査と訂正する。

目 次

I 序 論

1 調査に至る経過	1
2 遺跡の位置と環境	3
3 調査の方法と経過	7

II 杉の堂遺跡第31次調査

1 調査の概要	12
2 検出遺構と出土遺物	
(1)土 坑	14
(2)ビ ッ ト	17
(3)土器埋設遺構	17
(4)遺構外出土遺物	18

III 跡呂井遺跡

1 調査の概要	20
2 検出遺構と出土遺物	
(1)竪穴住居跡	20
(2)土 坑	27
(3)ビ ッ ト	28

IV 分 析

1 種子同定	33
--------	----

V 総 括

報告書抄録	63
-------	----

図版目次

第1図 遺跡位置図	1	第11図 B区遺構外出土遺物	18
第2図 周辺の地形	2	第12図 D区遺構配置図	20
第3図 周辺の遺跡	4	第13図 D区SI01竪穴住居跡	21
第4図 調査区配図	8	第14図 D区SI01カマド	22
第5図 A区遺構配置図	12	第15図 D区SI01上坑	23
第6図 B区遺構配置図	13	第16図 D区SI01出土遺物①	25
第7図 A・B区土坑	15	第17図 D区SI01出土遺物②	26
第8図 B区土坑出土遺物	16	第18図 D区上坑	27
第9図 B区SX01土器埋設遺構	17	第19図 D区土坑出土遺物	28
第10図 B区SX01出土遺物	18		

表目次

第1表 杉の堂遺跡の調査概要	6	第3表 跡呂井遺跡遺物観察表	30
第2表 杉の堂遺跡遺物観察表	29		

写真図版目次

写真図版 1	1 B区調査前風景①	41	2 D区SI01堆土断面②	49	
	2 B区調査前風景②	41	3 D区SI01埋土断面③	49	
	3 B区基本層序	41	写真図版10	1 D区SI01上坑検出状況	50
写真図版 2	1 B区試掘トレシ	42	2 D区SI01遺物出土状況①	50	
	2 B区調査後全景(南から)	42	3 D区SI01遺物出土状況②	50	
	3 B区調査後全景(北から)	42	写真図版11	1 D区SI01カマド①	51
写真図版 3	1 A区調査後全景(西から)	43	2 D区SI01カマド②	51	
	2 A区調査後全景(北西から)	43	3 D区SI01カマド③	51	
	3 A区調査後全景(西から)	43	写真図版12	1 D区SI01土坑5埋土断面	52
写真図版 4	1 A区SK01埋土断面	44	2 D区SI01土坑4埋土断面	52	
	2 A区SK04埋土断面	44	3 D区SI01土坑10埋土断面	52	
	3 A区SK05埋土断面	44	写真図版13	1 D区SI01壁柱穴	53
写真図版 5	1 A区SK06埋土断面	45	2 D区調査風景	53	
	2 A区SK07埋土断面	45	3 D区現地公開風景	53	
	3 B区SK08炭化物出土状況	45	写真図版14	1 D区SK15完掘状況	54
写真図版 6	1 B区SX01遺物出土状況①	46	2 D区SK17埋土断面	54	
	2 B区SX01遺物出土状況②	46	3 D区SK18埋土断面	54	
	3 B区SX01遺物出土状況③	46	写真図版15	1 D区SI01出土遺物①	55
写真図版 7	1 B区SK11埋土断面	47	2 D区SI01出土遺物②	56	
	2 B区SK12完掘状況	47	3 D区SI01出土遺物③	57	
	3 B区SK20埋土断面	47	写真図版16	1 D区SI01出土遺物④	58
写真図版 8	1 D区SI01検出状況	48	2 D区SI01出土遺物⑤	59	
	2 D区SI01完掘状況①	48	3 D区SI01出土遺物⑥	60	
	3 D区SI01完掘状況②	48	写真図版17	1 D区SI01出土遺物⑦	61
写真図版 9	1 D区SI01堆土断面①	49	2 D区SI01出土遺物⑧	62	

I 序論

1 調査に至る経過

「杉の堂遺跡」「跡呂井遺跡」は、水沢東バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

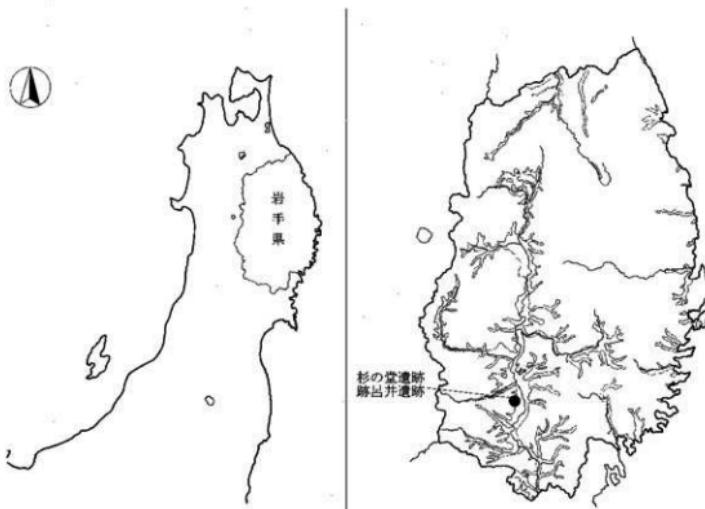
一般国道4号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約858kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

水沢東バイパスは、水沢市真城と同市倉河の間約9.6kmの区間で計画されており、水沢市内の国道4号の交通混雑解消と交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に、地域経済の発展の根幹となる道路として、昭和60年度に事業着手し、昭和62年度に用地着手、平成4年度に工事着手し、終点側から約3.6kmについて暫定2車線の供用を行っている。

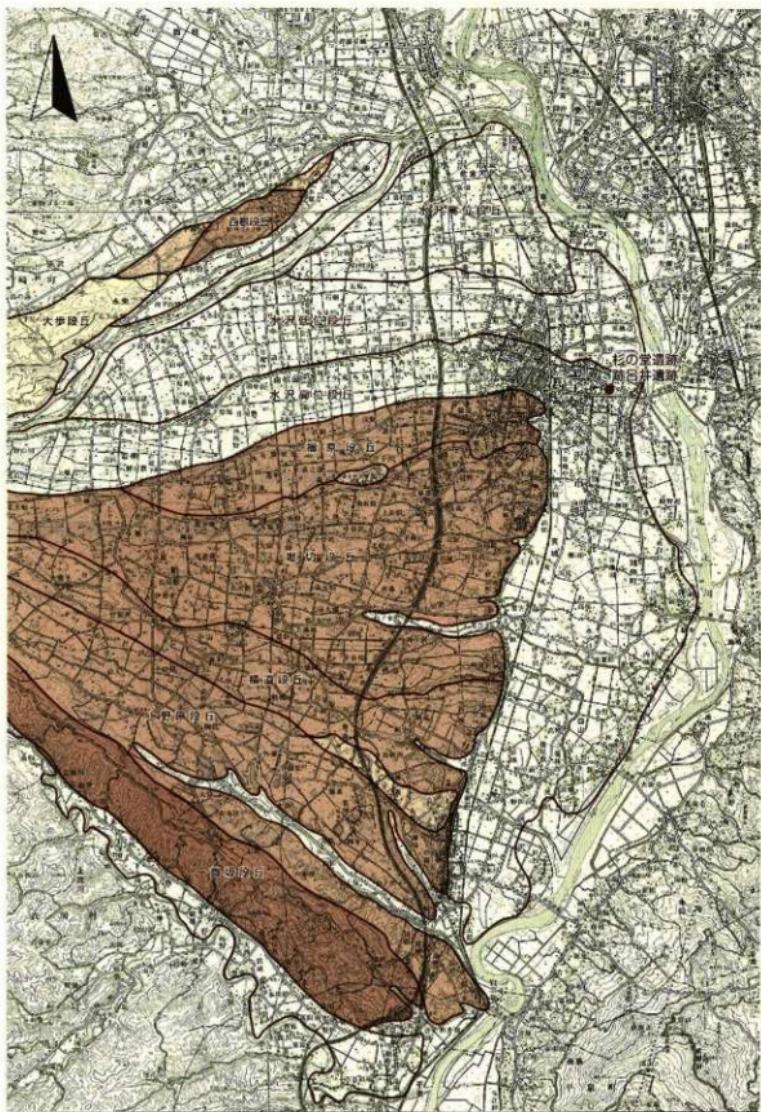
この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和62年度に分布調査を実施し、「杉の堂遺跡」「跡呂井遺跡」も確認されている。2遺跡については平成14年度および平成15年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成14年度試掘調査範囲については平成15年4月10日付けで、平成15年度試掘調査範囲については平成16年8月19日付けで岩手河川国道事務所長との間で受託契約を締結し、「杉の堂遺跡」「跡呂井遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 遺跡位置図



第2図 周辺の地形

2 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置

杉の堂遺跡は、岩手県水沢市東中通り二丁目123-1他に所在する。JR東北本線水沢駅からは東に約1.4kmの距離にある。本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「水沢」(NJ-54-14-14)の図幅に含まれ、その地点は北緯39度08分21秒、東経141度09分45秒付近である(世界測地系に基づく)。標高は42~43mで、遺跡の東方約700mを南流する北上川との比高差は約11mである。

遺跡の所在する水沢市は、北上山地と奥羽山脈に挟まれた低地帯に位置し、県庁所在地盛岡市からは、南に約65kmの距離にある。北は金ヶ崎町、南は前沢町、西は胆沢町、東は江刺市と接し、面積は約96km²である。市中心部には、南北に東北新幹線・東北本線・東北縦貫自動車道、国道4号、東西に国道343号・397号が走る。また、北上川と胆沢川の合流点にも近く、古くから胆沢地区的交通の要衝、中心的役割を果たしてきた。水沢市は、本県唯一の穀倉地帯としても有名である。

(2) 地理的環境

水沢市は北上川中流域に属し、ほぼ中央を北上川が南流する。北上川を境にして、東西の地形は大きく異なる。東岸の地質は主として古生層から成り、北上山地に連なる丘陵が迫る。一方、西岸は新第三系から構成され、胆沢扇状地が広がる。胆沢扇状地は、奥羽山脈の隆起と胆沢川の浸食・堆積によって形成され、県内最大、北上川流域最大の面積を持つ。扇状地の上には、広大な段丘群が展開している。段丘群は南から北に向かって低下しており、高位のものから人首段丘・胆沢段丘・水沢段丘と大別される。胆沢段丘はさらに上野原・横道・堀切・福原の各段丘に、水沢段丘は高位段丘・低位段丘に細別できる。水沢市域の多くの部分は水沢段丘に属する。

杉の堂・跡呂井遺跡は、水沢高位段丘の縁辺部に位置し、下位面との比高は4~5mである。花園町・神明町から杉の堂遺跡付近へと続く段丘崖には多数の湧水がみられ、繩文時代以来、周辺には数多くの集落が形成されてきた。

遺跡の立地する高位段丘は宅地やリンゴ畑として利用されており、遺跡北側の低位段丘が一面の水田地帯であるとの対照的である。これは、高位段丘における地下水位が相対的に低いことや、地質が細砂からシルト質で表土も1m前後と薄いことから、高位段丘部分が水田には適さない土地とされてきたことによる。結果として、遺跡は水田開発による破壊を免れてきた。遺跡周辺は、国道4号水沢東バイパスの伸長に伴い、今後の大きな発展が予想される地域でもある。

(川又)

(3) 基本層序

調査区内で確認された基本層序は以下の通りである。ただし、調査対象となった4つの調査区が大きく離れた位置関係にあること、同一調査区内でも地形の違いがみられることから、調査対象のすべての地点において同一の層序が確認された訳ではない。遺構検出面は基本的にⅢ層上面であるが、Ⅲ層の残存しない部分ではⅣ層上面で検出を行った。詳細は、各章の調査の概要の節に記すことをとする。

I層	10 YR 2 / 3 黒褐色シルト	現表土層。主に耕作土。地点により、I層の上にも盛土層がある。
II層	10 YR 2 / 1 黒色シルト	旧表土層
III層	10 YR 4 / 6 暗褐色シルト	検出面1
IV層	10 YR 5 / 6 黄褐色粘土質シルト	地山層 検出面2
V層	礫層	



第3図 周辺の遺跡

(4) 歴史的環境とこれまでの調査

さて、杉の堂・跡呂井遺跡周辺では、前項でみたような地形の違いによる遺跡の立地の特徴が顕著に観察できる。両遺跡を始めとする7世紀～10世紀代の遺跡は、低位面を臨む水沢段丘の縁辺部に立地する例が多い。両遺跡の立地する段丘北端は比高差4～5mをもつ段丘崖となり、これが高位面と低位面との境界になる。この段丘崖の下はいわゆる谷底平野である沖積地である。これに立地する遺跡の多くからは、弥生時代の痕跡が発見されている。とくに、常磐広町遺跡から弥生時代の水田が発見されたことは注目される。また同遺跡からは、十和田aテフラに覆われた古代の水田も発見されている。このように、この低地には微高地に集落が展開するもの、生産地としての利用が注目されるのである。

ところで、両遺跡と同じ段丘上に立地する遺跡をみると、段丘沿いの西側には跡呂井中陣場遺跡、常磐小学校遺跡、跡呂井館遺跡（蛇塚遺跡）が隣接する。また南側には、国道397号を挟んで熊之堂遺跡が所在している。これらの遺跡に対しては、既に何度か発掘調査が行われており居住域としての集落が発見されている。常磐小学校遺跡では9世紀前半の堅穴住居跡を始めとする遺構が発見されている。そのすぐ北側にある跡呂井館遺跡では、堀が館の周囲を廻っていた痕跡が残る。奈良時代の堅穴住居跡も発見されているが、館を構成する掘立柱建物跡も数棟調査されていることから、中世に属する居館跡であることが判明している。これらの遺跡東側には小支谷が南北に存在し、隣接する跡呂井中陣場遺跡と画し、さらに東側にもう1箇所小支谷が南北に入り、跡呂井遺跡と画している。跡呂井中陣場遺跡では、平安期の堅穴住居跡を中心に9世紀前半に属する遺構が発見されている。

このように、杉の堂遺跡・跡呂井遺跡が立地する周辺は、大きく2つの環境に分かれている。

跡呂井遺跡は、これまでに10次以上の調査が行われている。8世紀代・9世紀代を中心とする堅穴住居跡が発見されるとともに、中世の建物跡も検出されている。

杉の堂遺跡は、今回の調査で31次となり、水沢市教育委員会を中心に継続的に調査が行われてきた（第1表）。その結果、绳文時代晩期は東縁側に、奈良・平安期は北縁部と南縁部を中心に遺構が存在することが明らかとなっている。このうち南縁部の集落域は、熊之堂遺跡へと続くようである。

大まかにみると、集落の中心域をすらしながら各時期の集落が複合している。また、遺構の密度は段丘縁辺部が比較的高く、段丘の内側では希薄となることがこれまでの調査から明らかとなっている。しかし、断片的な調査が多いため、実際の集落の境界は不明と言わざるを得ない。

このように杉の堂・跡呂井両遺跡の周辺遺跡を見ていくと、8世紀代（とくに後半）と（8世紀末～）9世紀前半にその密度が高く、段丘の縁辺部に沿った広い範囲でいくつかの集落が展開していることがわかる。これらの時期はアテルイの動乱や胆沢城の設置といった一連の社会動向に合致するのであり、これらの遺跡はこの問題を解明するために重要な情報を提供するものと期待される。

（西澤）

第1表 彫の堂遺跡の調査歴

次 数	調査期間	位 所	調査原因	面積(m ²)	調査主体	文 献
1	昭和34	水沢市佐倉河字杉の堂24		11	水沢市教委	1
2	昭和35	水沢市佐倉河字杉の堂24		9	水沢市教委	1
3	昭和55	水沢市佐倉河字杉の堂24・105	範囲確認	81	水沢市教委	2
4	昭和56	水沢市佐倉河字杉の堂24・97-2	開発	30	水沢市教委	3
5	昭和56	水沢市佐倉河字杉の堂41	範囲確認	1000	水沢市教委	4
6	昭和57	水沢市佐倉河字杉の堂	範囲確認	53	水沢市教委	5
7	昭和58	水沢市佐倉河字杉の堂67・73-4	道路改良	117	水沢市教委	6
8	昭和59	水沢市市道前村・杉の堂線地内	防火水堀設置	約300	水沢市教委	未報告
9	昭和61	水沢市佐倉河字杉の堂30	宅地造成	239	水沢市教委	7
10	昭和62	水沢市佐倉河字杉の堂100-2	宅地造成	81	水沢市教委	8
11	昭和63	水沢市佐倉河字杉の堂85	集会所爆破	12.5	水沢市教委	9
12	平成4	水沢市佐倉河字杉の堂4-1・18		165	水沢市教委	未報告
13	平成7.10.21~12.10	水沢市神明町2丁目75-1・80	個人住宅建設	1313	水沢埋文	10
14	平成8.9.10~10.30	水沢市神明町2丁目61-2・66	個人住宅建設	1874	水沢埋文	11
15	平成9.5.20~6.27	水沢市佐倉河字杉の堂3-1	個人住宅建設	315	水沢市教委	12
16	平成9.8.30~10.21	水沢市神明町2丁目81-1・2・85	市道改良工事	170	水沢埋文	13
17	平成10.4.29~5.23	水沢市神明町2丁目85-3	個人住宅建設	131	水沢市教委	14
18	平成10.7.24~10.9./11.30~12.19	水沢市神明町2丁目, 東中通2丁目ほか	市道改良工事	1030	水沢埋文	15
19	平成10.10.7~12.22	水沢市佐倉河字杉の堂88-89	私道整備工事	346	水沢市教委	16
20	平成11.5.22~7.3	水沢市神明町2丁目81-5	個人住宅建設	240	水沢市教委	17
21	平成11.7.6~9.29	水沢市佐倉河字杉の堂88-89	個人住宅建設	330	水沢市教委	17
22	平成12.8.17~10.31	水沢市神明町61	個人住宅建設	963	水沢市教委	18
23	平成12.4.16~6.7	水沢市神明町2丁目33-1~33-5	個人住宅建設	268	水沢市教委	19
24	平成13.4.15~6.15	水沢市佐倉河字杉の堂88-3	個人住宅建設	230	水沢市教委	20
25	平成14.4.16~9.4	水沢市神明町2丁目58-45ほか	水沢東バイパス	6626	県埋文	21
26	平成15.4.10~4.30	水沢市神明町2-63	アパート建設	274	水沢埋文	22
27	平成15.4.10~6.16	水沢市神明町2丁目26-2ほか	水沢東バイパス	5745	県埋文	23
28	平成15.6.2~8.31	水沢市神明町2丁目26	範囲確認	600	水沢埋文	24
29	平成16.4.13~6.3	水沢市佐倉河字杉の堂28-4	個人住宅建設	331	水沢埋文	25
30	平成16.6.3~7.31	水沢市佐倉河字杉の堂	範囲確認	500	水沢埋文	25
31	平成16.8.19~10.15	水沢市東中通2丁目123-2ほか	水沢東バイパス	5318	県埋文	本番

文 献

1	松井清彦・杉山莊平1961『岩手県水沢市杉の堂遺跡調査報告』『史蹟』第61巻
2	林謙作ほか1981『杉の堂遺跡-第3次発掘調査概報-』岩手県水沢市文化財報告書第4集
3	林謙作ほか1982『杉の堂遺跡-第4次発掘調査概報-』岩手県水沢市文化財報告書第5集
4	伊藤博史ほか1986『水沢遺跡群範囲確認調査-昭和60年春掘調査概報-』岩手県水沢市文化財報告書第15集
5	林謙作ほか1983『杉の堂遺跡-第5次発掘調査概報-』岩手県水沢市文化財報告書第10集
6	伊藤博史ほか1984『市道前村・杉の堂遺跡改良工事調査報告書』水沢市教育委員会
7	伊藤博史ほか1987『水沢遺跡群範囲確認調査-昭和61年度春掘調査概報-』岩手県水沢市文化財報告書第16集
8	伊藤博史ほか1988『水沢遺跡群範囲確認調査-昭和62年度春掘調査概報-』岩手県水沢市文化財報告書第18集
9	伊藤博史ほか1989『水沢遺跡群範囲確認調査-昭和63年度春掘調査概報-』岩手県水沢市文化財報告書第19集
10	佐々木千鶴子・高橋千鶴子1996『杉の堂遺跡』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第7集
11	伊藤博史・千田政博1997『杉の堂遺跡調査-諏訪井二ヶ領地区的調査-』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第9集
12	高橋千鶴子1998『水沢遺跡群範囲確認調査-平成9年度春掘調査概報』岩手県水沢市文化財報告書第30集
13	佐々木千鶴子1999『杉の堂遺跡-市道前の堂・北田線の3段-』に伴う景観調査報告書Ⅰ-1『水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集
14	佐々木千鶴子1999『II-1 杉の堂遺跡』『水沢遺跡群範囲確認調査-平成10年度春掘調査概報』岩手県水沢市文化財報告書第33集
15	下出生幸1999『杉の堂遺跡-市道前の堂・北田線改良工事に伴う景観調査報告書Ⅱ-』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第13集
16	千田先生・佐藤良和1998『平成10年度水沢市遺跡発掘調査報告会資料』
17	千田先生・高橋千鶴子2000『水沢遺跡群範囲確認調査-平成11年度春掘調査概報』岩手県水沢市文化財報告書第31集
18	千田先生・高橋千鶴子2001『III-4 杉の堂遺跡(第22回)』『水沢遺跡群範囲確認調査-平成12年度春掘調査概報』岩手県水沢市文化財報告書第35集
19	伊藤博史・佐々木志保2004『水沢遺跡群範囲確認調査-平成14年度春掘調査概報』岩手県水沢市文化財報告書第38集
20	佐藤良和・櫻庭育美2003『平成14年度水沢市内遺跡群調査会資料』
21	丸山直義ほか2004『杉の堂遺跡群範囲調査報告書』岩手県水沢市文化財調査事業団埋蔵文化財センター第425集
22	佐藤良和・小野寺洋那2004『水沢遺跡群範囲確認調査-平成15年度春掘調査概報』岩手県水沢市文化財報告書第39集
23	丸山直義ほか2004b『杉の堂・諏訪井遺跡』『岩手県埋蔵文化財発掘調査特報』岩手県水沢市文化財調査事業団埋蔵文化財センター第455集
24	佐藤良和・小野寺洋那2004『平成15年度水沢市内遺跡群調査報告会資料』
25	千田先生・伊藤みどり2005『平成16年度水沢市内遺跡群調査報告会資料』

3 調査の方法と経過

(1) 調査区の設定

調査対象は杉の堂・跡呂井の2遺跡で、杉の堂遺跡の調査区は3箇所に分かれる。調査の便宜上、杉の堂遺跡の各調査区を北側に位置するものからA・B・C区とし、跡呂井遺跡をD区とした。本書においては、以下この呼称を用いる。

(2) グリッド設定

国家座標第X系に合わせて基準点を設定し、これに沿って $5 \times 5\text{ m}$ の小グリッド、 $50 \times 50\text{ m}$ の大グリッドを定めた。このグリッド設定は、当センターが平成14・15年度に杉の堂遺跡を調査した際に設定したものに従っている。A区に補点2点、B区に基準点3点・補点1点、D区に補点2点を設置した。国家座標第X系における、基準点・補点の座標値は以下の通りである。

	座標値（日本測地系）	座標値（世界測地系）	標高（m）
基準点1	X=-96185.000 Y=28770.000	X=-95876.3842 Y=28468.9227	H=43.440
基準点2	X=-96185.000 Y=28755.000	X=-95876.3840 Y=28453.9228	H=43.550
基準点3	X=-96085.000 Y=28770.000	X=-95776.3850 Y=28468.9228	H=43.875
補点1	X=-96085.000 Y=28755.000	X=-95776.3848 Y=28453.9228	H=43.796
補点2	X=-95830.000 Y=28650.000	X=-95521.3872 Y=28348.9236	H=43.630
補点3	X=-95830.000 Y=28665.000	X=-95521.3872 Y=28363.9233	H=43.800
補点4	X=-95880.000 Y=28835.000	X=-95571.3866 Y=28533.9220	H=41.560
補点5	X=-95880.000 Y=28860.000	X=-95571.3867 Y=28558.9219	H=41.360

(3) 粗掘・遺構検出

調査区内の雜物除去後、検出面までの深さ・層序や遺構分布、遺物出土状況を確認する目的で、人力により部分的に試掘を行った。試掘の結果を参照しながら、バックホーを使用して調査区全面の表土除去を行い、遺構検出を行った。なお、一部の調査区（C区）では、トレーナによる部分的な表土除去のみで調査を終了している。

(4) 遺構の命名・精査と遺物の取り上げ

検出した遺構は、種別ごとに検出順にSI01堅穴住居跡、SK01土坑のように命名した。基本土層の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

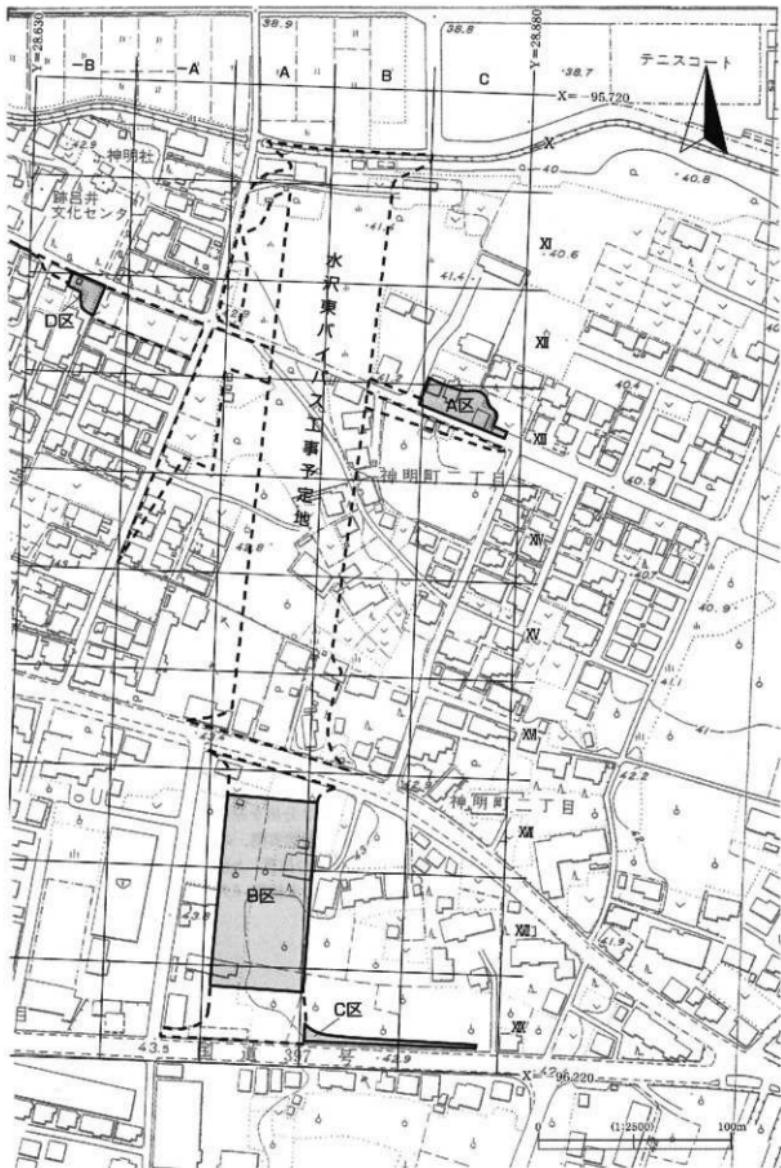
遺構の精査は、堅穴住居跡は4分法、土坑・柱穴状小土坑は2分法を原則として、半裁一土層断面写真撮影→土層断面図実測→完掘→完掘平面写真撮影→完掘平面図実測、のような流れで進めた。

遺物の取り上げは、遺構内出土遺物は、出土位置（遺構内での位置）と出土層位（埋土上位・中位・下位・床面など）を記録して取り上げ、遺構外出土遺物は、出土位置（グリッド）と出土層位（基本層序）を記録した上で取り上げた。

(5) 遺構実測・写真撮影

野外調査における断面図実測は、基準杭に付された標高値をもとに水平に水糸を張り、それを基準として行った。平面図実測は、グリッドに合わせて水糸で $1 \times 1\text{ m}$ のメッシュを張り、それを基準として行った。ただし、遺構密度の薄い部分については、水糸を張る手間を省くために光波を多用した。遺構実測図は原則として縮尺20分の1で作成したが、一部の遺構については10分の1の縮尺も用いた。

野外調査における写真撮影は、35mm判カラーリバーサル1台、 6×7 判モノクローム1台を使用し、遺構の埋土断面・遺物の出土状況・遺構の完掘状況を中心に撮影した。他に、デジタルカメラ1台をメモリに使用している。



第4図 調査区配置図

(6) 調査経過

平成16年8月19日(木)午前9時より作業開始。登録作業員数は14名(男性5名・女性9名)。器材をプレハブへ搬入し、整理や環境整備、作業員への説明などを行う。

8月20日(金)B区(杉の堂遺跡)4,620m²の調査開始。調査区内には丈1m以上の雑草が密生しており、2日がかりで草刈りを行う。B区は、北側が市道大町杉の堂線、南側が国道397号に面しており、これらは近隣の小・中学校の通学路にあたるため、調査区の周囲に安全対策用の防護柵を設置する。

8月25日(水)B区、試掘開始。幅2mのトレンチを10本設定した。いずれの地点においても表土は比較的薄く、遺構検出面の地形は概ね平坦であることを確認する。大半の部分では遺物は出土せず、遺構もこの時点では確認していない。唯一、北側に設定したトレンチにおいて、潰れた状態の土器甕が出土した(後にSX01として登録)。

8月27日(金)B区、バックホーによる表土除去を開始。地山の上の漸移層上面までを日安とし、掘削を行う。なお、排土を調査区外へ搬出する手間を避けるため、まず調査区の南半部のみを表土除去し、排土は北半部へ仮置きする方針をとった。南半部の調査が終了次第、仮置きした排土を南半部へ反転し、北半部の表土除去を行う計画であった。遺構検出を行ったところ、各トレンチの試掘結果から予想された通り、遺構密度は薄く、遺物はまばらであった。土坑・柱穴状小土坑を数基ずつ確認したが、調査区の大半は風倒木痕で占められていた。

9月7日(火)A区(杉の堂遺跡)498m²の調査開始。現況は調査区に隣接するアパートの駐車場である。駐車場を利用していた住民の理解を得るために、事前にアパートの各部屋を訪問し、事情説明を行う。その後バックホーにより表土除去を行うが、盛土・散砂利が厚く、その撤去に手間取る。調査区の西半部は過去に削平を受けた模様で、盛土直下に礫層が露出し、遺構は確認できなかった。東半部では土坑6基を確認したが、現代の耕作痕により大半が破壊されていた。アパート住民の生活への影響を最小限に食い止めるため、調査を迅速に進めるよう心がけた。

9月9日(木)バックホーをA区からD区(跡呂井遺跡)へ移動。D区表土除去開始。

9月10日(金)A区部分終了確認。

9月13日(月)A区、バックホーにより埋め戻しを行い、駐車場を調査前の状態へ戻す。同日、D区の遺構検出を行う。住居跡1棟が明瞭な方形プランで確認される。かなり大型の住居跡とみられる。

9月15日(水)D区竪穴住居跡(SI01)、ベルトを十字に設定し、掘削を開始する。住居跡の精査には、この後約1ヶ月間を費やすことになる。

9月27日(月)B区、バックホーで調査区北半部の表土除去を行う。当初予定では、南半部の調査終了後、北半部に仮置きした排土は全て南半部へ反転する方針であったが、委託者からの要請により、排土の一部を調査区外へ搬出することとなった。そのため、表土除去は排土運搬作業終了後に着手することとなった。D区では住居跡の精査を進めていたが、この週の後半に台風が接近し、調査区全体が冠水する。ポンプによる排水に時間を費やし、精査は中断を余儀なくされる。

10月4日(月)A区、北半部の遺構検出を開始。南半部と同様、風倒木痕が多くみられる。上坑・柱穴状小土坑を確認。順次、精査を進める。

10月12日(火)午前、終了確認。調査終了予定は当初10月30日であったが、2週間前倒しの、10月15日(金)に変更となる。午後、現地公開を実施。周辺住民には事前に案内のビラを配布した。来訪者は19名。D区の竪穴住居跡を中心に説明を行う。

10月14日(木)手つかずであったC区(杉の堂遺跡)200m²によく着手する。トレンチを2本設定し掘削を行うが、遺構・遺物は確認されず、そのまま調査終了となる。B区の地形測量も同時に行う。

10月15日(金)撤収日。撤収準備と遺構精査の残りを急ピッチで進める。午後、トラックが到着し資材の積み込みを行うが、現場ではその後も調査を続ける。午後4時、慌ただしさの中ですべての作業を終了した。

(川又)

杉の堂遺跡第31次調査

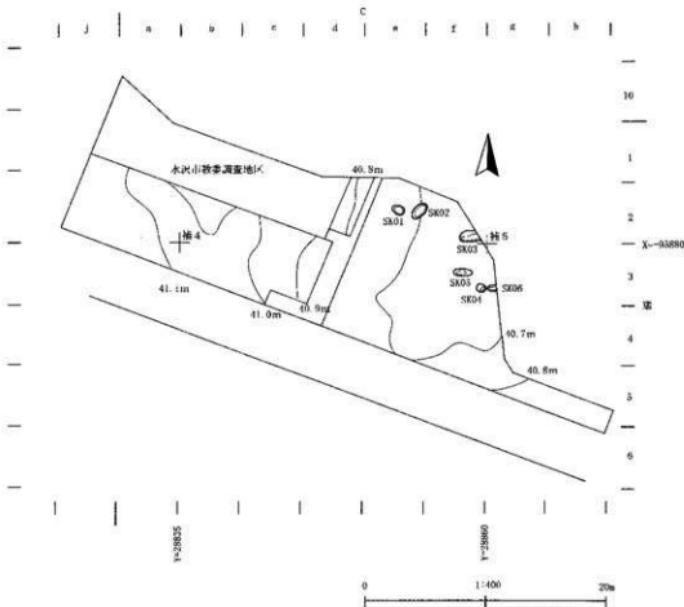
II 杉の堂遺跡第31次調査

1 調査の概要

杉の堂遺跡の調査対象部分は大きく3箇所に分かれる。3箇所のうち最も北側に位置する調査区をA区(498m²)、A区の南側約200mに位置し、国道397号に面する最も広い調査区をB区(4,620m²)、B区の南東側にある歩道沿いの東西に細長い調査区をC区(200m²)とした。各調査区の位置については、第4図を参照されたい。

(1) A区の概要

現況はアパートの駐車場および畠地である。遺構確認面の標高は40.7~41.1mであり、北側に行くにつれて緩やかに下がっていく。基本層序は概ね第1章で示した通りであるが、調査区の西側ではI層(表土)直下がV層(礫層)となる。これは本来の地形が西側の方で高く、宅地造成のため削平を受けたことによると考えられる。ここでは遺構は確認されていない。一方、東側においてはII・III層が残存する。遺構検出はIII層上面で行った。確認した遺構数は土坑6基である。調査区内では近年の耕作痕と思われる搅乱が多数確認された。遺物は、遺構外から土器片54.93gが出土している。

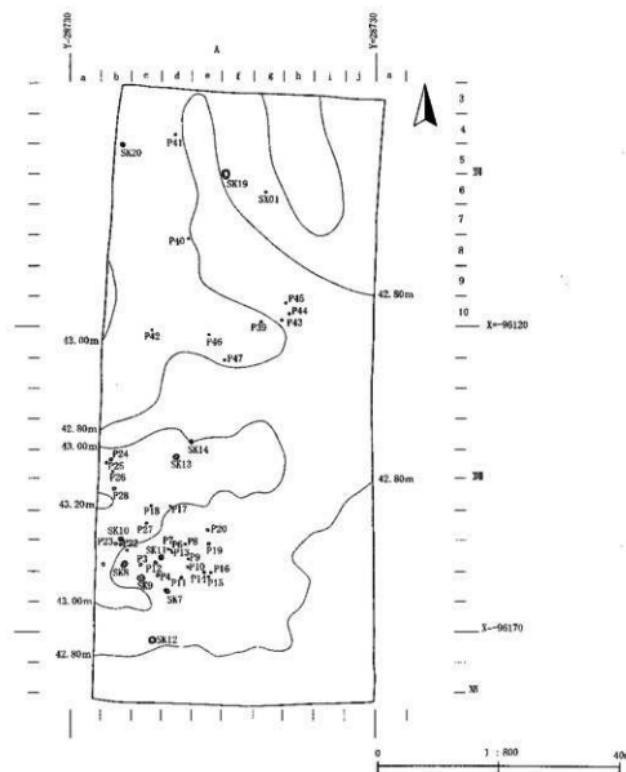


第5図 A区遺構配置図

(2) B・C区の概要

現況は畠地および宅地である。遺構確認面の標高は42.8～43.2mで、南西から北東方向に向かって僅かに下り勾配で傾斜している。調査区内の基本層序は概ね第1章に示した通りであるが、地形の低い北側ほどⅡ層の堆積が厚くなる。遺構検出はⅢ層上面で行った。B区で確認した遺構数は、土坑10基、ピット37個、不明遺構1基である。調査区内では風倒木痕や近年の耕作痕と思われる攪乱が多い数確認された。遺物は土器1,069.55g、石器11.6gが出土している。

C区では遺構・遺物ともに確認されなかった。



第6図 B区遺構配置図

2 検出遺構と出土遺物

(1) 土 坑 (SK)

杉の堂遺跡では、A・B区合わせて16基の土坑を確認した。その大半は遺物の出土がなく、性格も不明なものが多い。SK 01～06は杉の堂A区、SK 07～14・19・20は杉の堂B区に位置する。土坑の配置については、第5・6図を参照されたい。

SK01土坑 A区XVII C2 e グリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIII層であり、黒褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は梢円形状を呈し、規模は105×75cm、確認面からの深さは20cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層であり下位に直径10～20cmの円礫がいくつか含まれていた。遺物の出土がなく時期・性格ともに不明である。

SK02土坑 A区XVII 2C e グリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIII層であり、黒褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は梢円形を呈し、規模は155×90cm、深さは確認面より14cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層であり、黄褐色土のブロックが含まれる。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK03土坑 A区XVII C2 f グリッドに位置し、一部が調査区外に延びる。SK 05・06と同一方位をもつ。検出はIII層であり、黒褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は現状で長梢円形を呈すると推定され、規模は現状で150×95cm、深さは確認面より30cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層であり、黄褐色土のブロックが多く含まれる。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK04土坑 A区XVII C3 f グリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIII層であり、黒褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は円形を基調とし、規模は径80cm、深さは確認面より30cmである。底面は開口部に比べ東側に偏っている。堆積土は黒褐色シルトの単層であり、黄褐色土のブロックが含まれる。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

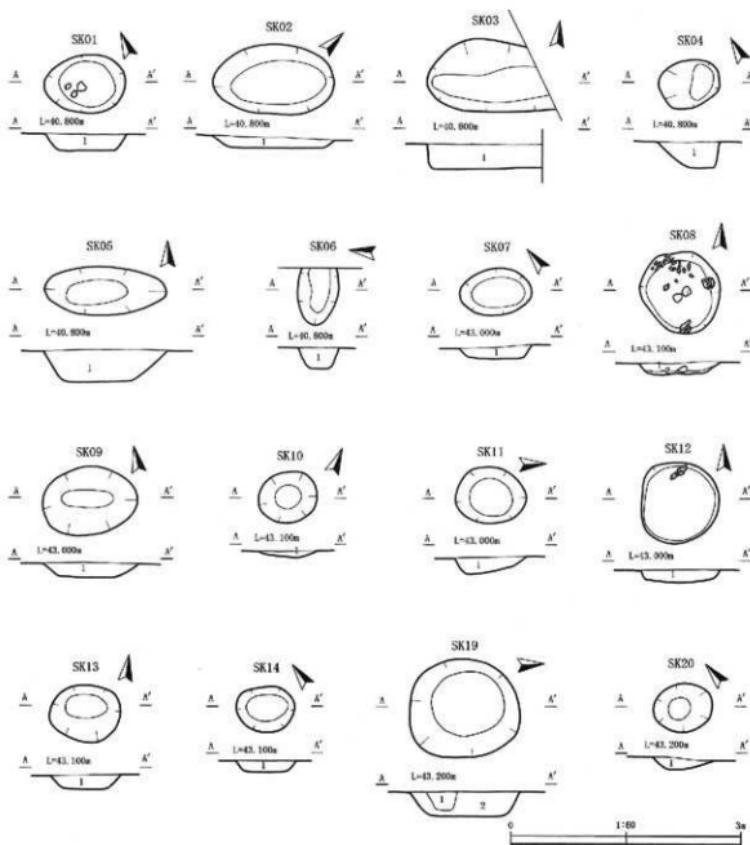
SK05土坑 A区XVII C3 f グリッドに位置し、他遺構との重複はない。SK 03・06と同一方位をもつ。検出はIII層であり、黒褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は長梢円形を呈し、規模は155×62cm、深さは確認面より40cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層であり、黄褐色土のブロック・炭化物が少量含まれる。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK06土坑 A区XVII C3 f グリッドに位置し、東側が調査区外に延びる。他遺構との重複はない。SK 03・05と同一方位をもつ。検出はIII層であり、黒褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は長梢円形を呈し、規模は現状で74×55cm、深さは確認面より26cmである。堆積土は黒褐色シルトの単層であり、黄褐色土のブロックが微量含まれる。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK07土坑 B区XIX A9 d グリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、暗褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は梢円形を呈し、規模は90×60cm、深さは確認面より15cmである。堆積土は暗褐色シルトの単層であり、炭化物が含まれる。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK08土坑 B区XVII A8 b グリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、にぶい黄褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は円形を呈し、規模は径100cm、深さは確認面より14cmである。底面中央に径10cm前後の礫が2個底面よりやや浮いた状況で存在する。堆積土は2層に分層でき、上位がにぶい黄褐色シルト層、下位が炭化物層である。1層には焼土粒が含まれ、2層には炭化材が含まれることから、焼成を伴う土坑と考えられるが詳細は不明である。遺物の出土がなく、時期は不明である。

SK09土坑 B区XVII A9 c グリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、暗褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は梢円形を呈し、規模は90×60cm、深さは確認面より15cmである。堆積土は暗褐色シルトの単層であり、炭化物が含まれる。遺物は15.33 g出土したが、図示



遺構名	層位	色調	記号	土性	粒性	しまり	混入物・特徴
SK01	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	中	中	表面付近に種を多量含む。
SK02	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを中心、炭化物を微量含む。
SK03	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む。
SK04	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを中心、炭化物を微量含む。
SK05	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	中	強	黄褐色土ブロックを微量含む。
SK06	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	中	強	黄褐色土ブロックを微量含む。
SK07	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	中	中	炭化物、黄褐色土粒を含む。
SK08	1	にじみ栗色	10YR4/3	シルト	中	やや強	炭化物を少量、無土粒を少量含む。 〔炭化物（一部は木が残る）層〕
SK09	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	中	中	炭化物、黄褐色土粒を含む。
SK10	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	中	中	炭化物、黄褐色土粒を含む。
SK11	1	褐色	10YR4/4	シルト	やや弱	中	黄褐色土粒を少量、内側（φ 2cm）、遺物を含む。
SK12	1	黒色	10YR2/1	シルト	やや弱	中	炭化物を多量、上位に遺物（投げ込みか？）を含む。
SK13	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	やや弱	中	黄褐色土ブロックを多量含む。
SK14	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	やや弱	中	黄褐色土ブロックを多量含む。
SK15	1	黒褐色	10YR3/1	シルト	やや弱	弱	上位に繩（φ 10cm）を含む。〔近代の擾乱？〕
SK16	2	黄褐色	10YR5/6	シルト	やや弱	中	黄褐色土と黒褐色土の混合土
SK17	2	褐色	10YR4/1	シルト	やや弱	弱	

第7図 A・B区土坑

できるものはない。時期・性格ともに不明である。

SK10土坑 B区IXA7 bグリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、暗褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は円形を基調とし、規模は径65cm、深さは確認面より8cmである。堆積土は暗褐色シルトの単層であり、炭化物が含まれる。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK11土坑 B区XVIA8 c～dグリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は円形を基調とし、規模は径75cm、深さは確認面より20cmである。堆積土は褐色シルトの単層であり、径2cm前後的小円礫が含まれている。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK12土坑 B区IXA1 cグリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、黒色シルトの広がりをもって確認した。平面形は円形を基調とし、規模は径110cm、深さは確認面より15cmである。堆積土は黒色シルトの単層であり、炭化材・炭化物が多く含まれる。遺物は157.39 gの土師器が出土している。堆積土上位にはほぼ完形の状態で出土した。器表には2次焼成を受けた痕跡が認められないため、後で投げ込まれた可能性が残る。1は内面に黒色処理が施されない杯で、ゆるやかに内湾する体部をもつ。口縁部は短く外反する。調整は外縁とも回転ナデ、底部切り離しは回転糸切りである。この土器のみをみれば9世紀末～10世紀前半の時期に位置づけられよう。

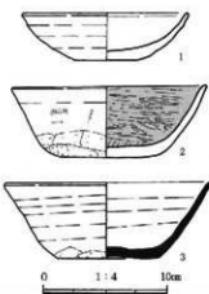
本土坑の性格として、炭化物が多く、炭化材も認められることから焼成に伴うものと考えられるが、詳細は不明である。時期は出土状況にやや疑惑が残るもの土器から9世紀末以前と考えられる。

SK13土坑 B区XV 5 dグリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、灰黄褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は梢円形を呈し、規模は90×73cm、深さは確認面より18cmである。堆積土は灰黄褐色シルトの単層であり、黄褐色土ブロックが含まれる。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK14土坑 B区XVIA4 d～eグリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、灰黄褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は梢円形を呈し、規模は76×60cm、深さは確認面より15cmである。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK19土坑 B区XVIIA5～6 fグリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は円形を呈し、規模は径125cm、深さは確認面より31cmである。堆積土は1～2層に分層できる。1層は黒褐色シルト、2層は黄褐色シルトである。1層は別時期の掘り込みかもしれない。出土遺物は近現代の磁器類であることから、この時期に伴うと考えられる。性格は不明である。

SK20土坑 B区XVIIA5 bグリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、暗褐色シルトの広がりをもって確認した。平面形は梢円形を基調とし、規模は75×60cm、深さは確認面より14cmである。堆積土は褐色シルトの単層である。粘性しまりともに欠け、根による擾乱と思われたが、遺物の出土が見られることから土坑とした。遺物は完形品の杯が2点重なって出土した。総量は641.22 gである。2は土師器杯、3は須恵器杯である。2は底径7



第8図 B区土坑出土遺物

cmと広い底部をもち、体部は下半以外ほぼ直線気味に聞く。口縁部はわずかに外反する。内面調整は黒色処理、ミガキが、外面は回転ナデ、体部下半にヘラケズリが施されている。底部切り離しはヘラ切りである。3は底部から直線的に聞く体部を有し、口縁部でやや外反する。いずれも焼成は異なるものの器面調整、底部切り離し、器形など類似している点が多い。これらの土器はこれまでの年代観に当てはめると9世紀初頭の年代が想定できる。したがって、本土坑の時期は9世紀初頭と考えられるが、後世に投げ込まれた可能性は残る。

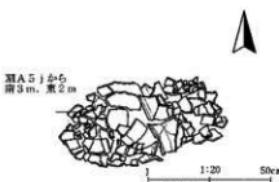
(2) ピット(小穴)

ピットは、B区でP1~28, 39~47までの37個を検出している。A区・C区ではピットは確認していない。ピットの配置については第6図を参照されたい。多くはB区南部に集中し、中央~北部にはまばらに存在する。これらの区域は調査前には住宅が建っていた区域に近く、あるいはそれに関連するものかもしれない。また、各ピットには、いずれも柱痕を有するものが皆無であることなどから柱穴とする根拠はない。出土遺物がないため時期を決定することができず、性格も不明とせざるを得ない。

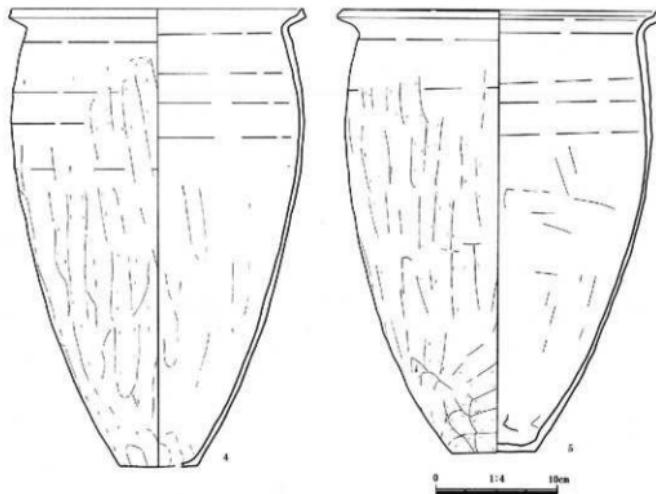
(3) 土器埋設遺構(SX)

SX01土器埋設遺構 B区XVII A 6gグリッドに位置する。検出はⅢ層上面で土師器のまとまりをもって確認した。土師器甕を2個合わせてした土器埋設遺構である。土師器甕周囲を精査し、掘り込みを確認したが発見できなかったが、本来は掘り込みを伴っていると考えられる。この土器埋設遺構の下端はV層の礫が露出している部分であり、検出面であるⅢ層は非常に薄く堆積しているのみであった。このため本来存在する掘り込み面は削平された可能性が高い。検出状況は、4が西側に、5が東側に倒位で設置され、口縁部を合わせて設置されていた。2個の土師器甕は約10cmの厚さしかなく、かなり圧縮され、破碎されていた。削平とともに圧縮された状態であり遺存状態が著しく悪い。甕の内部には径10cm前後の円礫がいくつか含まれていたが、地山に含まれる礫と同一であり、混入したものと考えている。土師器甕4は復元底径が6cmと口径(24cm)に比べて著しく小さいのが特徴である。全体的な形状は口縁部、あるいは体部上位に最大径をもち、底部に向かって窄まっていくいわゆる「砲弾」形を呈する。口縁部は短いが強く外反し、端部はわずかに上方に引き出される。したがって、口縁端部の断面形は三角形を呈する。調整は回転ナデを基本とし、体部下半に縱位のヘラケズリが施されるが一部上位にまで及んでいる。タタキの痕跡は確認されなかった。器壁は非常に薄く成形されており、色調は淡橙~灰白色を呈する。5も4と同様の形状を呈するが、最大径の位置がやや下がる。調整は回転ナデを基本とし、外面には縱位のヘラケズリが施されるが、底部付近では斜位~横位にケズリの方向が変わる。この甕も非常に薄く成形されている。いずれも外部にはススが付着することから、実際に使用したものを、転用して使用されたと考えられる。

性格としては、その出土状態から土器甕であると考えることができるが、残存状態が悪く積極的には判断が付かない。年代は土師器甕自体の時期が9世紀前半と考えられることから、この遺構の時期もほぼ同時期であると考えられる。



第9図 B区SX01土器埋設遺構

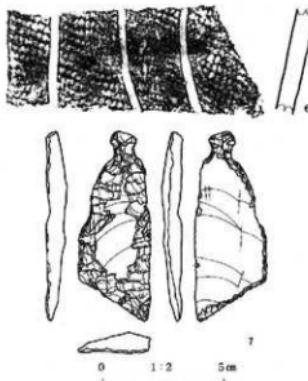


第10図 B区SX01出土遺物

(4) 遺構外出土遺物

各調査区の検出作業中に発見された遺物である。これらはその出土層から、後世の耕作等によって動かされたものと考えられる。2点 66 gを図示した。

6は縄文土器深鉢片である。縦方向の沈線で区画された楕円形状の文様の一部と考えられ、大木9式に相当する。7は石匙である。頁岩製であり、末端と側面に刃部がつく。



第11図 B区遺構外出土遺物

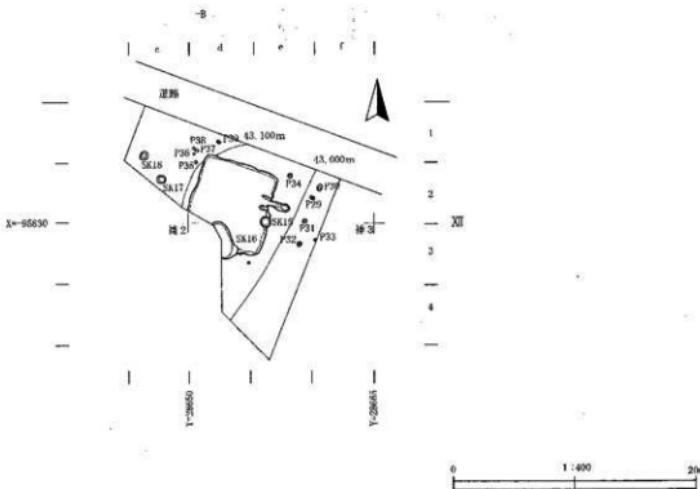
跡 呂 井 遺 跡

III 跡呂井遺跡

1 調査の概要

調査前の現況は畠地・宅地であった。遺構確認面の標高は43.00m～43.10mで、概ね平坦である。調査区内の基本層序は第Ⅰ章で示した通りである。遺構検出はⅣ層上面を行った。遺構の残存状況は比較的良好であった。

確認された遺構は、堅穴住居跡1棟、土坑3基、ピット11個である。遺物は、土師器23.6kg、須恵器5.6kgが出土している。



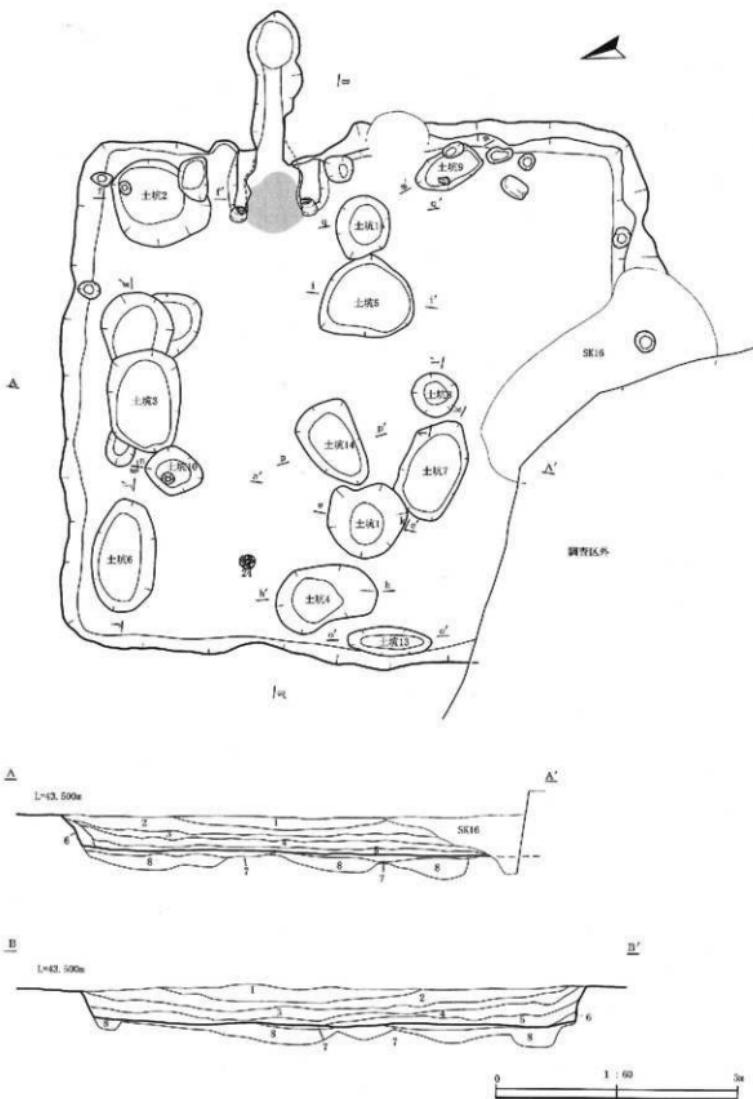
第12図 D区遺構配置図

2 検出遺構と出土遺物

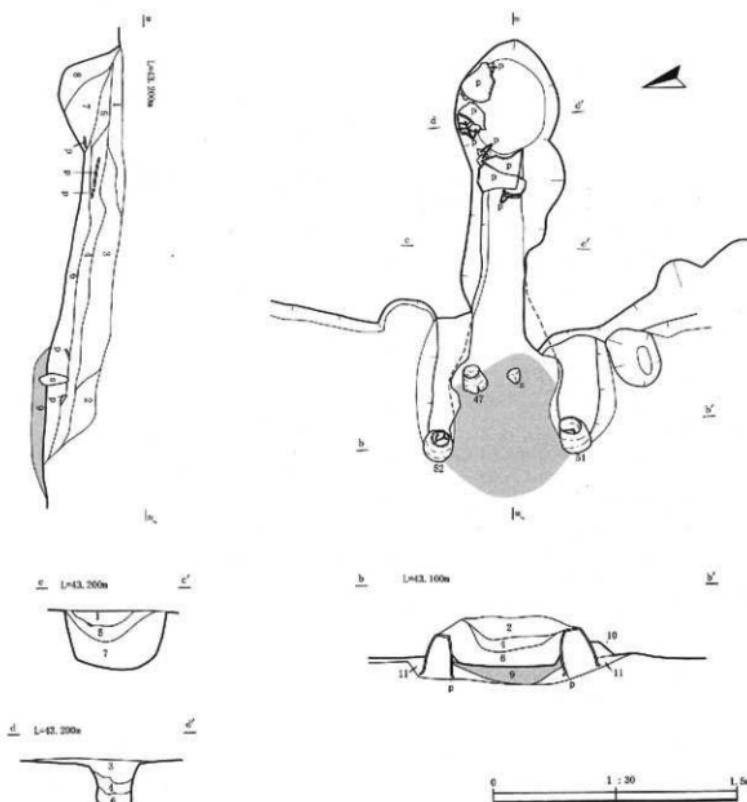
(1) 堅穴住居跡(SI)

S101堅穴住居跡 D区中央X II-B 2 d グリッドに位置する。IV層上面で検出した。東壁をSK15、南壁をSK16に切られる。南西隅は調査区外にあるため確認していない。周辺にはピット11個を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

平面形は方形を基調とする。規模は、東西壁間が620cm、南北壁間が680cmである。床面は概ね平坦で、固く締まる。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は北壁40cm、東壁30cm、南壁45cm、西壁43cmである。

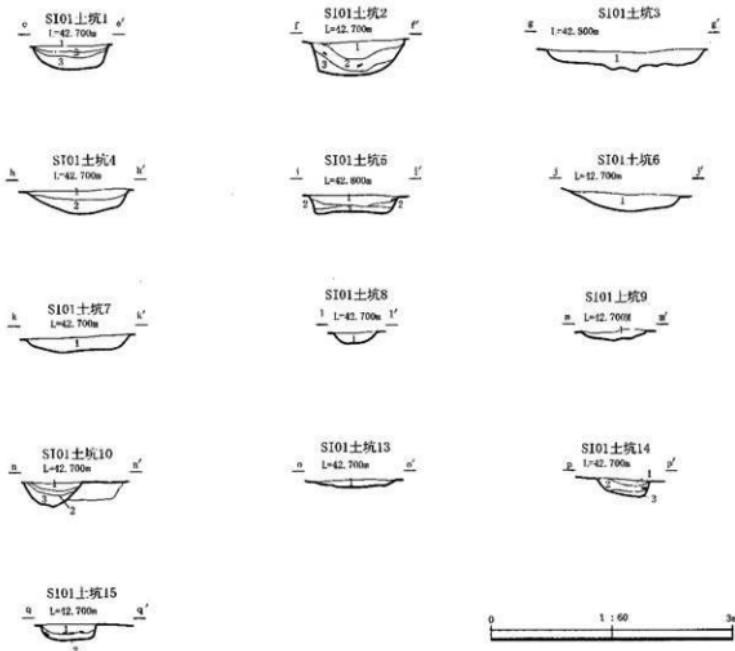


第13図 D区S101整穴住居跡



遺構名	部位	色調	記号	土性	粒性	しまり	混入物・特徴
SI01	1	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	中	中	燒土粒少量
SI01	2	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや強	やや強	皮仔物・燒土粒極少量、To-a火山灰?
SI01	3	暗褐色	10YR3/4	粘質土	中	中	燒土粒・黃褐色土粒（1より多い）
SI01	4	褐褐色	7.5YR2/3	粘質土	中	中	黃褐色土粒（3よりは少ない）
SI01	5	黒褐色	10YR2/2	粘質土	強	中	墨色土ブロック・黃褐色土（地山範囲）ブロックが主体の層
SI01	6	墨褐色	5YR3/1	粘質土	中	やや強	黃褐色土ブロック多量。【住居初期の貼床】
SI01	7	暗褐色	10YR3/3	粘質土	中	中	黃褐色土ブロック。【住居中期の貼床】
SI01	8	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	やや強	黃褐色土ブロック多量。【旧期の貼り床】
SI01カマド	1	暗褐色	7.5YR3/1	粘質土	中	中	燒土粒少量
SI01カマド	2	灰黄褐色	10YR5/2	粘質土	中	やや強	燒土粒・黃褐色土ブロック
SI01カマド	3	暗褐色	7.5YR3/3	粘質土	中	やや強	黃褐色土ブロック・燒土粒【天井崩落上】
SI01カマド	4	暗赤褐色	5YR3/4	粘質土	中	やや強	燒土ブロック多量【天井崩落上】
SI01カマド	5	黒褐色	7.5YR2/2	粘質土	中	中	成形物少量
SI01カマド	6	暗褐色	7.5YR3/2	粘質土	やや強	中	燒土ブロック・黃褐色土粒【本来の焼道埋土】
SI01カマド	7	褐褐色	7.5YR2/3	粘質土	やや強	中	燒土ブロック・土器片
SI01カマド	8	暗褐色	7.5YR3/3	粘質土	中	中	燒土ブロック・灰化物多量
SI01カマド	9	深褐色	2.5YR4/6	粘質土	やや弱	やや強	【カマド燃焼部底土】
SI01カマド	10	褐色	10YR4/4	粘質土	中	強	【カマド構造部】
SI01カマド	11	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや強	中	黃褐色土ブロック多量【新期の貼り床】

第14図 D区 SI01 カマド



遺構名	層位	色調	土性	粘性	しまり	混入物・特徴
S101土坑01	1	暗褐色	粘質土	やや強	中	黒褐色土ブロック・黄褐色土ブロック多量
S101土坑01	2	暗赤褐色	粘質土	やや強	中	燒土ブロック多量
S101土坑01	3	黄褐色	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック多量・焼土粒少量
S101土坑02	1	暗褐色	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック多量・下層との境界に炭化物の痕
S101上坑02	2	褐色	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック多量
S101上坑02	3	暗褐色	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック少量
S101土坑03	1	暗褐色	粘質土	やや強	中	黄褐色土・燒土ブロック多量
S101土坑04	1	暗褐色	粘質土	やや強	中	黒褐色土ブロック・黄褐色土ブロック多量
S101土坑04	2	黑色	粘質土	中	中	上位に燒土ブロック・灰の層
S101土坑05	1	暗褐色	粘質土	やや強	中	黒褐色土ブロック・黄褐色土ブロック多量
S101土坑05	2	暗褐色	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック多量
S101土坑05	3	黃褐色	粘質土	中	中	燒土ブロック
S101土坑06	1	深褐色	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック多量
S101土坑07	1	暗褐色	粘質土	中	中	燒土ブロック少量
S101上坑08	1	暗褐色	粘質土	中	中	燒土ブロック
S101上坑09	1	深褐色	粘質土	中	中	炭化物・黄褐色土ブロック
S101上坑09	1	黑褐色	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック (初期の貼付)
S101土坑10	1	黑褐色	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック
S101土坑10	2	黑色	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック
S101土坑10	3	にぶい黄褐色	粘質土	中	中	新規土坑の壁と同じ
S101土坑13	1	黑褐色	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック
S101土坑14	1	黑褐色	粘質土	中	中	燒土ブロック多量
S101土坑14	2	極端赤褐色	粘質土	中	中	燒土ブロック
S101土坑14	3	暗褐色	粘質土	中	中	燒土ブロック・炭化物少量
S101土坑15	1	暗褐色	粘質土	中	中	新規貼床と同じ
S101土坑15	2	暗赤褐色	粘質土	中	中	燒土粒・炭化物・土器片

第15図 D区 S101 土坑

堆積土は6層に分けられる。大別すると、上位には暗褐色粘質土、中位には黒褐色粘質土、下位には褐色粘質土が堆積する。いずれの層にも焼土ブロックが混入し、中位には土器片も多く含まれていた。堆積土からは、鉄滓も少量出土している。

カマドは東壁中央のやや北よりに位置する。煙道の方向はS-74°-Eである。煙道の長さは、壁面から先端まで175cmを測る。煙道底部は外側へ向けて緩やかに上昇し、煙出し上坑部分は深さ35cmを測る。カマド堆積土は8層から成る。土層の観察から、割り抜き式であった煙道天井部が、住居廃絶後に崩落したものと考えられる。煙道底部からは土師器壺、須恵器壺が出土している。袖部分には土師器壺が逆位で埋設されており、その上には構築土と考えられる褐色粘質土が残存していた。燃焼部焼土は93×78cmの範囲で広がり、床面から10cmの深さまで焼成が及ぶ。

床面では、柱穴9個と土坑13基を確認している。柱穴は、北壁から東壁・南壁にかけて、壁面沿いに配置する。規模は開口部径40~130cm、深さは床面から10~30cm程度である。土坑は埋土により、暗褐色土主体のものと、黒褐色土主体のもの2種類に分類される。これは土坑の構築時期に差があるためと考えられる。重複関係から、暗褐色土主体のもの（土坑1~5・7・15）は新期、黒褐色土主体のもの（土坑6・8~10・13・14）は旧期である。土坑の構築時期が2期に分かれることから、住居の建築後、ある一定期間の後に建て替えが行われた可能性が考えられる。床面には貼床が施されるが、これも場所により2層に分けられることから、土坑と同様、2時期に亘ると考えられる。新期の貼床は暗褐色土、旧期の貼床は黒褐色土である。構築の順序を整理すると、旧期の貼り床→旧期の土坑→新期の貼り床→新期の土坑となる。上に記したカマドについては、住居の新期に伴うものと考えられる。なお、カマド燃焼部以外に焼土1基を確認している。位置は北壁中央やや東よりで、34×34cmの範囲で弱く被熱していた。住居の旧期のカマド跡と思われ、周辺を注意深く観察したが、煙道等は確認できなかった。

遺物は、床面・諸施設（土坑・カマド・貼り床）や堆積土を中心に出土している。55点(11,506g)を図示した。

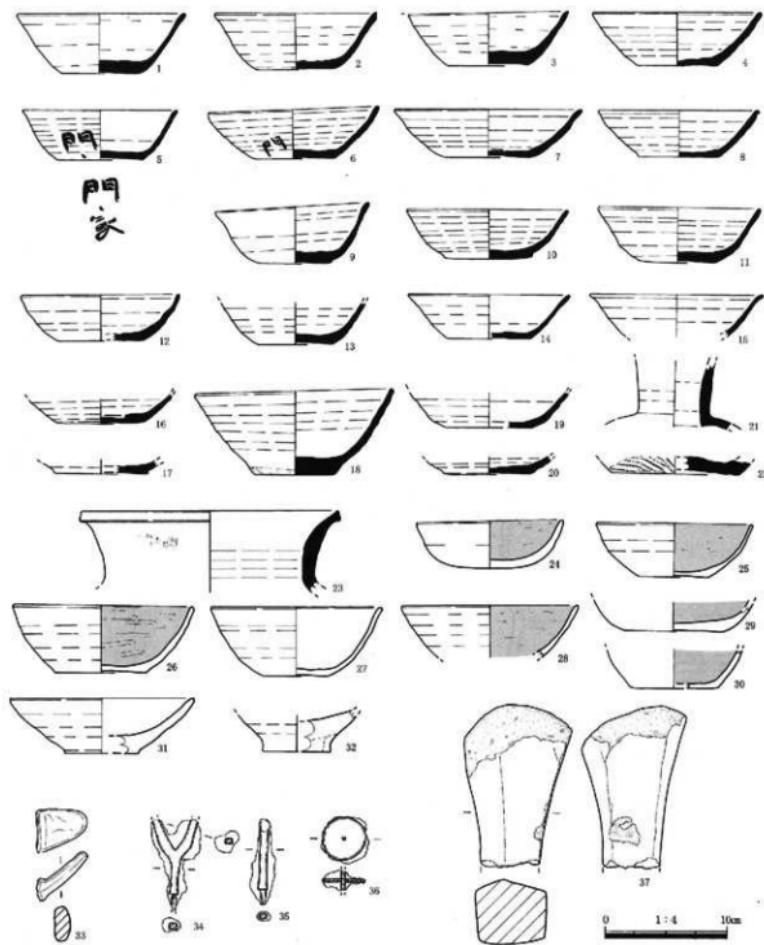
1~20は須恵器壺である。12点が床面やそれに構築された土坑内より出土しているが、7・15~17・19・21~23の8点は堆積土中より出土している。これら須恵器壺をみると体部の形状は直線的に開くもの（1~8・14）、ゆるやかに内湾するもの（9~12・18）の2種に大別できる。法量差を考慮すると數種類の部類が存在する。調整は内外面とも回転ナデが施されるが、底部切り離し技法には差異が認められる。多くを占めるのがヘラ切り（4・6・9・10・14・16・18~20）である。糸切り技法が確認できるのは少ない（1・7・8・11・13）。また再調整が施されているもの（2・3・12・17）も比較的多く含まれる。

21は須恵器長頸瓶の頸部片、22・23は須恵器壺の底部と口縁部片である。いずれも断片的であり、堆積土からの出土である。

24~30は土師器壺である。多くはロクロ調整であるが、24のみロクロを使用しない。27・30は堆積土中であり、それ以外は床面や貼床、カマドから出土している。ロクロ調整の壺はゆるやかに内湾する体部をもつ点で共通している。内面調整は磨滅が多いがミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法をみると、ヘラ切りと糸切りが混在している。31・32は堆積土上位から出土した、壺と柱状高台である。器壁が厚く、色調は橙色を呈している点で共通する。31は器高の低い壺である。32は欠損部分が大きいものの、高台の特徴から柱状高台と判断した。この2点はこれまでのところ古代末期（11世紀前後）に位置づけられるものである。

33は双耳壺の耳部分であろう。34・35は鉄鎌である。34は雁又式である。関部はやや台形状に広がっている。35は先端が欠損しているため形状は不明である。36は紡錘車の円盤部である。直径が3.6cmとやや小さい。37は砥石である。約半分を欠損している。断面が5角形を呈し、いずれの面も使用した痕跡が残る。

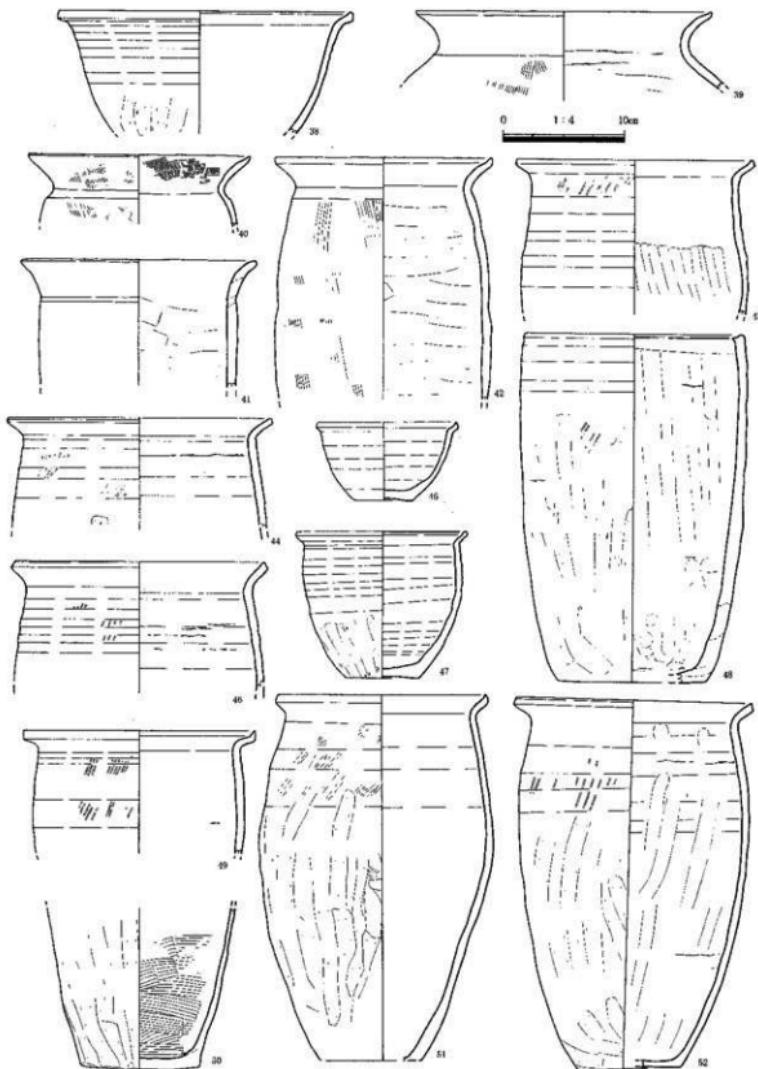
38が土師器鉢、39~52が土師器壺である。38は底部を欠損しているがおおよその形状は復元できる。39~42は調整にロクロを使用しない壺で、いずれも底部を欠損している。39はその形状から球



第16図 D区S101出土遺物①

胴状を呈すると推定されが、その他は筒状のいわゆる長胴状を呈する。39以外は頸部に段差や稜線の痕跡が残るが明瞭ではない。調整は口縁部にヨコナデが、体部にはハケメが施される。

43～52は調整にロクロを使用した土師器壺である。口縁部の形状をみると頭部から「く」字状に外反するもの（43～45・52）と外反したのちに上方へ引き出されるもの（46・49・51）、内湾するもの（48）に大別できる。このうち48の形状はあまり類例のないものであるとはいは別器種かもしれない。



第17図 D区 SI01 出土遺物②

調整をみると上半部は回転ナデが施される。下半部は外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。また、外調整の場合、ヘラケズリの前にタタキの痕跡が残るものが多く観察できる(42~44・46・49・51~52)。

45・47は口径・器高とも小型品に属する。47は出土状況からカマド支脚として使用されていた。51・52はカマド袖の先端に倒位で設置されていた。袖の補強として設置されたもので、51が煙道に向かって右袖に、52が向かって左袖にあった。いずれも完形に近いものである。

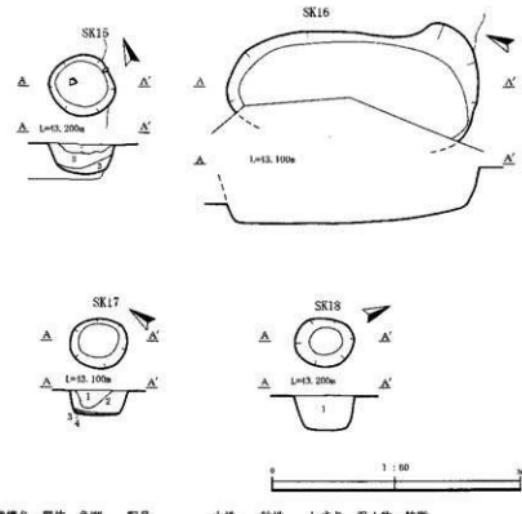
(2) 土坑 (SK)

SK15土坑 D区X II-B2~3fグリッドに位置し、SI 01と重複する。重複関係から、本土坑の方が新しい。検出はIV層であり、灰黄褐色シルトの広がりをもって確認した。

平面形は円形を基調とし、規模は径80cm、深さは確認面より38cmである。底面はS I 01の堆積土中におさまる。堆積土は3層に分層でき、上位から灰黄褐色シルト、灰黄褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土の順に堆積する。遺物は土師器が若干認められたが、多くは3層下位であることから重複するSI 01に包含する遺物と判断した。したがって、遺物の出土がなくなるものの、時期は重複関係から、平安時代以降と考えられる。

SK16土坑 D区X II-B

3eグリッドに位置し、S I 01と重複する。西側は調査区外へ延びるために完全掘を行っていない。検出はIV層であり、黒褐色粘質土の広がりをもって確認した。平面形は現状では精円形を呈し、規模は長径が321cm、短



遺構名	層位	色調	記号	土性	粒性	しまり	混人物・特徴
SK15	1 黒褐色	5YR3/1	粘質土	やや強	やや強	無	炭化物・焼土物
SK15	2 黒褐色	5YR2/2	粘質土	やや強	やや強	無	燒土粒少量・黃褐色土粒
SK15	3 黒褐色	7.5YR2/2	粘質土	やや強	中	無	黃褐色土粒少量
SK17	1 黒褐色	7.5YR3/3	粘質土	中	中	無	黃褐色土粒少量
SK17	2 黒褐色	7.5YR3/3	粘質土	中	中	無	黃褐色土粒多量
SK17	3 黒褐色	7.5YR1.7/1	シルト	弱	弱	弱?	多量
SK17	4 黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	弱	中	無
SK18	1 黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	中	無	黃褐色土粒状に多量

第18図 D区土坑

径が84cm、深さは住居床面より28cmである。SI 01検出時には確認できなかったため、同時に掘削を行っている。したがって、実際の確認面はSI 01と同一面であり、規模・深さとともに一回り大きいと考えられる。堆積土は3層に分層でき、上位より黒褐色粘質土(1層)、暗褐色粘質土(2層)、黒褐色粘質土(3層)の順に堆積する。1・2層には燒土粒が含まれており、鐵滓の出土が確認されたことから製鉄関連の炉の検出が期待されたが、調査区内からは検出されなかった。遺物は299.71g出土し、そのうち3点(67g)を図示した。53~55は須恵器坏である。53は体部が直線的に開く形状を呈するが口径が小さく他とは区別される。54・55はいずれも底部片のみであり全容は不明。両者とも底部切り離しは糸切りである。重複関係や出土遺物などから本土坑はSI 01より新しいと考えられる。し

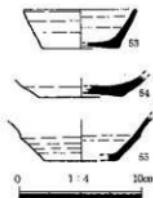
たがって、9世紀前半以降の平安時代に属するものと考えられる。

SK17 土坑 D区X II-B 2 d グリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、暗褐色土の広がりをもって確認した。平面形は円形を基調とし、規模は径73cm、深さは確認面より32cmである。堆積土は1～4層に分層できる。1・2層は暗褐色粘質土、3層は黒色シルト、4層が黒褐色粘質土である。遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

SK18 土坑 D区X II-B 1 d グリッドに位置し、他遺構との重複はない。検出はIV層であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は円形を基調とし、規模は径77cm、深さは確認面より45cmである。堆積土は黒褐色粘質土の単層であり、黄褐色土のブロックが斑状に含まれている。遺物は出土せず、時期・性格ともに不明である。

(3) ピット(小穴)

ピットは、D区全体でP 29～39までの11個を確認している。ピットの配置については第12図を参照されたい。柱痕有するものは皆無であり、柱穴とする根拠はない。位置はSI01の周囲に近接しているが、配列に規則性はみられず、SI01との関連は不明である。出土遺物がないため時期を決定することができず、性格も不明とせざるを得ない。



第19図 D区土坑出土遺物

杉の堂遺跡31次 土器調査表

No.	器種	種別	剖位	出土地点	層位	含合率 (%)	色調	焼成	上径 (mm)	下径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	備考
1	杯	井内胎	SX12	四土上	80	にじみ	黄褐	良	13.3	4.0	5.0	4.7	147	口：窓ナゲ／体：窓ナゲ 内輪ナゲナダ
2	杯	土胎	SX20	四土上	86	灰	黄褐	良	15.8	6.0	8.3	3.0	300	口～上：窓ナゲ／中：ハツナダ 窓ナゲ／下：ケジ
3	片	深腹器	SX20	90	灰	燒成	良	16.5	6.3	8.2	3.13	313	口：窓ナゲ／下：手付ヘタケズリ 窓ナゲナダ	
4	塊	土瓶	SX01裏		燒成	良	23.8	37.7	6.4	1.88	ロ～上	口：窓ナゲナダ／ 中：窓ユビナダ		
5	塊	土瓶	SX01四		灰白	良	26.6	36.5	6.9	1.770	ロ～下	口：窓ナゲナダ／ ロ～下：ハラナダ		

杉の堂遺跡31次 遺物觀察表

No.	種別	山(位置)	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
6	焼成土器	B区焼成外	—	—	—	0.7	55	人入9式
7	石 砧	B区焼成外	—	7.8	3.0	0.8	11	

表題標記并遺跡

跡呂井遺跡 土器調査表

No.	器種	種別	部位	出土 位置	量 位	肉厚 (mm)	内径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	底形 種類	表面 色調	裏 面 色調	底 部 色調	横 内 面			縦 内 面			備 考
														外 周	山	山	内 周	山	山	
23 壺	深鉢器	口縁	S101 上	解						灰褐色	灰褐色	(21.1) (6.8)	-	123	(タタキ一) 回転ナデ	(タタキ一) 回転ナデ	-			やや粗。
24 手	土師器	口~底	S101 北東未塗							黄褐色	黄褐色	(12.1) 4.1	-	159	口縁・ヨコナダメツ	ミガキ	マメツ			やや粗。薄褐色(6.1~7.6cm)。内面褐。底板(6.1~7.6cm)。内面褐。底板(6.1~7.6cm)。内面褐。
25 手	土師器	口~底	S101 北西未塗							淡青褐色	淡青褐色	(12.9) 4.5	5.7	54	マメツ (ヨコナダメツ)	マメツ (ミガキ)	マメツ			やや粗。底板(6.1~7.6cm)。内面褐。底板(6.1~7.6cm)。内面褐。
26 手	土師器	口~底	S101 脱色シヤト							淡青褐色	淡青褐色	(14.6) 5.7	7.5	204	回転ナデ	マメツ (ヨコニガキ)	ヘタ切り			底。白色粒子を含む。内面。
27 手	土師器	口~底	S101 北							[5.5] やや青白	[14.1] 5.7	5.4	74	回転ナデ	マメツ (ミガキ)	朱切り			底。水口部無子粒。内面。内面にうるし? 外面にスジ?	
28 手	土師器	口~底	S101 緑床							黄褐色	黄褐色	(14.4) (4.3)	-	32	山形・ツヅ	ミガキ	マメツ			底。白色粒子を含む。内面。
29 手	土師器	底形	S101 緑床							黄褐色	黄褐色	(13.0) (2.5)	(8.0)	55	マメツ					底。赤褐色粒子を含む。
30 手	土師器	底形	S101 上~中							淡青褐色	淡青褐色	(9.2) (3.2)	20	マメツ						底。赤褐色粒子を含む。内面。
31 手	土師器	口~底	S101 深土上位							[5.5] やや青白	[15.1] 4.6	(6.1) 71	同底ナデ	同底ナデ	マメツ					底。砂粒(6.2mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
32 杯状 高台	底形	S101 深土上位								淡青褐色	淡青褐色	(9.7) (3.0)	5.6	32	回転ナデ	回転ナデ	マメツ			底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
33 瓢平	把手	S101 土柄15 (耳)			種	良							21	マメツ						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
34 瓢	土師器	口~底	S101 方マツド 電・火候2		種	良	(27.0) (11.0)	-		口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
35 瓢	土師器	口縁	S101 方マツド 電・火候2		種	良	(26.3) (6.9)	-		口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
36 瓢	土師器	口縁	S101 方マツド 電・火候2		種	良	(19.7) (6.3)	-		口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
37 瓢	土師器	口~底	S101 扇形15		種	良	(20.7) 11.3	-	176	口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
38 瓢	土師器	口~底	S101 扇形15		種	良	(27.0) (11.0)	-	165	口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
39 瓢	土師器	口~底	S101 扇形15		種	良	(26.3) (6.9)	-	130	口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
40 瓢	土師器	口~底	S101 扇形15		種	良	(19.7) (6.3)	-	38	口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
41 瓢	土師器	口~底	S101 土先15		種	良	(20.7) 11.3	-	176	口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
42 瓢	土師器	口~底	S101 扇形15		種	良	(19.1) 21.5	-	280	口縁・ツヅ	口縁・ツヅナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
43 瓢	土師器	口~底	S101 扇形15		種	良	(21.0) (13.9)	-	195	タタキ・回転ナデ	ローハ・ト・ユビナデ	ローハ・ト・ユビナデ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
44 手	土師器	口~底	S101 扇形15		種	良	(22.6) (10.1)	-	160	回転ナデ	回転ナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
45 手	土師器	口~底	S101 上焼2		種	良	(22.6) (10.1)	-	167	回転ナデ	回転ナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
46 手	土師器	口~底	S101 カマチ+火候3		種	良	(22.8) (11.8)	-	845	口縁ナデ/山形ナデ	口縁ナデ/山形ナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
47 手	土師器	口~底	S101 北東カマチ		種	にふい	(15.3) 13.2	6.5	506	ローハ・ト・ユビナデ	ローハ・ト・ユビナデ	マメツ								底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。
48 手	土師器	口~底	S101 F位		種	良	(19.0) (11.1)	113.4	1030	ローハ・ト・ユビナデ	ローハ・ト・ユビナデ	マメツ		-						底。砂粒(6.1~7mm)。赤褐色粒子を含む。内面。

跡呂井遺跡 土器調査表

No.	種別	部位	出土地点	層位	透か率 (%)	色調	焼成	口径 (cm)	周長 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	内面	調査	地	土	備考
50	甕	土桶形	山~年	S101	馬上	土	透	(20.5) (11.0)	-	221	回転ナメ	マメツ	-	-	-	やや粗。底径 (φ 1 mm 以下)
51	甕	土壺形	体~黄	S101	ガラフ	良	(16.4) (14.5)	10.6	661	中~下: ヘタゲアリ	中~下: ハナメ	ヘタゲアリ	-	-	-	やや粗。底径 (φ 1 mm 以下)
52	甕	土壺形	口~黄	S101	ガラフ	良	18.6 (32.2)	-	1334	上: タケナカ、目無ナメ/下: タケナカ	上: タケナカ	-	-	-	-	色スコリや含む。
53	片	漆器	小~黃	S101	ガラフ	良	21.1	33.2	9.0	1652	上: 回転ナメ/下: タケナカ	上: タケナカ	タケナカ	タケナカ	タケナカ	タケナカ
54	片	漆器	底部	SK16	漆器	目無	(9.1)	3.2	6.0	20	回転ナメ	-	-	-	-	タケナカ
55	片	漆器	底部	SK16	10	灰	良	-	(1.5) (7.0)	37	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	白色灰、赤・褐色斑
																色斑?

跡呂井遺跡 陶物調査表

No.	種別	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
34	鉢	DKS10	南西区上層	(7.5)	(3.7)	0.5	31
35	鉢	DGS101	上層~中層	(6.9)	0.7	0.4	16
36	鉢	DGS101	土焼	(1.7)	3.5	3.5	17
37	瓦	DKS101	地	(13.4)	8.8	8.6	687

IV 分析

跡呂井遺跡より出土した炭化種実

吉川純子(古代の森研究会)

1 試料

跡呂井遺跡は、水沢市の平安時代の住居跡である。住居跡はSI01の大型住居のみ確認された。発掘担当者がこの住居の竈覆土を採取して水洗選別を行ったところ若干の炭化種実を検出した。炭化種実の同定は实体顕微鏡を用いておこない、同定した分類群を出土部位別に表1にまとめた。同定した炭化種実は乾燥標本として(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに保管されている。

2 出土した炭化種実

本遺跡では、イネ、オオムギ、キビ近似種を出土している。本遺跡のオオムギは皮オオムギと考えられ、東北地方の冷涼な気候に適応性が高い種類を出土している。平安時代の北上市塙向II遺跡、西川目遺跡、高木中館遺跡からも皮オオムギの出土が確認されており、平安時代の岩手県で一般的に利用されていた可能性が高い。また、キビ近似種は北上市の高木中館遺跡からも出土が確認されているが、本遺跡のキビ近似種種子は長さ1.5mmで、高木中館遺跡より出土したキビ近似種の長さ2mmと比較すると厚みがなくやや小さい。北海道恵庭市では8世紀ころの柏木川11遺跡から4000点余のキビ種子を出土しており、長さの平均値は約1.8mmであった(吉崎, 1990)。また、平安時代青森県青森市の野木遺跡ではキビを17粒出土しており、この平均値も約1.8mmであった(吉崎, 2000)。本遺跡では1点のみの出土であるのでたまたま未熟種子が出土したと考えられる。

本遺跡のSI01住居は大型であり、比較的地位の高い人物、あるいは何か特殊な職業とも考えられるが、このように大型の住居からもイネのほかにオオムギやキビ近似種のような雑穀が出土していることは興味深い。古代の東北地方では、大規模な港湾都市である青森県市浦村十三湊遺跡では13遺構の炭化種実分析でイネ、コムギを出土したが、オオムギは出土していない(吉川, 2005)。本遺跡で出土したオオムギは皮オオムギとみられ、現在は麦茶のほか家畜の飼い葉として利用されている。十三湊のような海沿いの港町では馬を飼う家が少ないとめオオムギを出土せず、内陸部では馬を飼うことが一般的であるためしばしばオオムギが出土するとも考えられる。

表1 跡呂井遺跡SI01住居跡より出土した炭化種実

分類群名		出土部位	SI01
イネ	<i>Oryza sativa L.</i>	炭化胚乳	4
オオムギ	<i>Hordeum vulgare L.</i>	炭化種子	1
キビ近似種	<i>Panicum cf.miliaceum L.</i>	炭化種子	1

3 出土分類群の形態記載

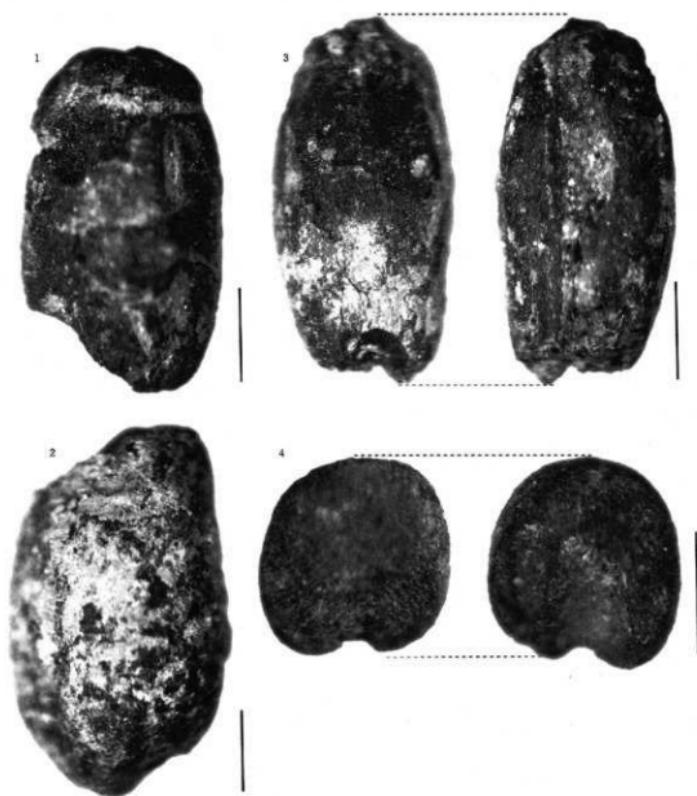
イネ：炭化胚乳を2粒出土し、いずれもやや焼け膨れていって、穎の痕跡が確認できない。1粒は5mm近い長さで大変大きく、厚さもあり、東北地方の古代のイネとしてはかなり大きい方ではないかと考えられる。長さは長いが、長さと幅の比率は1.7程度なので短粒系であり、種子の中でも成長の良好な個体が出土したと考えられる。

オオムギ：炭化種子を出土した。長さ3.7mmでオオムギとしてはやや小さい。背面には中央に溝があり、腹面には基部に孔がある。背面を観察すると溝と種子全体がやや湾曲していてそれほど厚くないため、未熟あるいは不熟の種子と考えられる。形状は細長く、基部の突出はあまり激しくないが、皮オオムギと考えられる。

キビ近似種：炭化種子を出土した。やや角ばった円形で腹面基部に丸い孔があり、背面には種子長の2分の1程度の楕円形溝状の胚がある。長さは1.5mmほどでやや小さく、横から見ると丸みがないためキビ近似種としたが、やや未熟なキビ種子の可能性が高い。

引用文献

- 吉川純子。2005. 第3節 十三渡跡より出土した炭化種実について。「十三渡跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第398集。青森県教育委員会. p.206-208
- 古崎昌一。1990. 北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体。柏木川11遺跡. P.104-113
- 古崎昌一・榎坂浩代。2000. 第8節 青森県野木遺跡出土平安時代の炭化植物種子。野木遺跡III—青森中核工芸団地整備事業に伴う遺跡発掘調査報告。青森県埋蔵文化財調査報告書 第281集。青森県教育委員会. p.65-72



図版 猿島遺跡 S101 墓より出土した炭化種実
1, 2 : イネ、炭化胚乳、3 : オオムギ、炭化種子、4 : キビ近似種、炭化種子、
(3, 4 は左が腹面、右が背面、スケールは 1 mm)

V 総括

以下の項目について若干の検討を行いまとめとしたい。

1 跡呂井遺跡出土土器の年代

SI01からは一軒の住居としては多くの土器が出土している。これらの土器の特徴を以下に挙げて年代を想定していくこととする。

須恵器は壺・甕・長頸瓶が出土している。壺は20点出土しており、器形により2種に大別できる。A類は体部が直線的に開く器形であり8点が出土している。B類は体部が内湾するもので6点出土している。そのほか、大型壺が1点、器形不明が5点ある。点数ではA類がやや多い状況である。調整技法は体部が内外面とも回転ナデが施されるものの、底部切り離し技法にはヘラ切りが多くの割合で採用されている。切り離し技法が観察できるもの15点をみると、ヘラ切りのもの9点、糸切りのもの6点である。ちなみに底部に再調整が施されるものは4点ある。法量をみると、口径が13~14cmの間に収まるものと15cm前後のもの2者に分けられ、そのうち前者が主体となる。器高は5cm前後、4cm前後、7cm前後にまとまりがある。前2者は比率的に同率が存在している。後者は1点のみである。底径はおおよそ6~7cmのあいだにおさまる。

壺以外の器種をみると、甕や長頸瓶が出土するが量的に少なく、器形を復元できるものはない。

土器部には、壺、小型甕、大型甕、鉢がある。

壺は量的に少なく須恵器の1/3程度の出土量である。器形は、体部が内湾するものがほとんどである。外面調整はロクロ調整のもの6点、ヨコナデのもの1点である。内面調整はミガキと黒色処理がほどこされるものがほとんどである。底部切り離しはヘラ切りのもの1点、糸切りのもの2点であるが、不明なものが4点と多く詳細は不明といわざるを得ない。

甕は14点が出土している。内訳はロクロ調整がないものの4点、小型甕2点、ロクロ(調整)甕8点である。ロクロ(調整)甕は口縁部の形態で3分できる。A類は口縁端部に面が形成されるもの、B類は口縁端部が凹むもの、C類は口縁端部が上方に引き出されるものの3者である。これらは口縁部に端面が形成される点で共通する。48のように頸部がなく口縁部が直立するものは甕よりは別の器種に分類されるかもしれない。ロクロ(調整)甕の調整技法をみると、多くは回転ナデであるが、その前段階にタタキが施されるものがほとんどである。下半部は縦位のケズリが施されている。底部は口徑に比べて著しく小さいものが多い。ロクロ調整が施されない甕では、外側にはハケメが残存するものが多い。これらの甕の特徴は、杉の堂遺跡SX01の土器埋設構造と類似している。

鉢は1点のみの出土である。調整技法は甕と同様であり、下半部はケズリ調整される。

以上のような特徴をもつ上器群が出土しているが、これらの特徴をしめすものには伊藤がいうII群土器に相当すると考えられる(伊藤1987、1990)。II群土器は十師器にロクロを使用したものとしないものがあきらかに供するグループとされる。その特徴をみると、須恵器は体部が直線的に外傾し、器高が低く比較的安定した器形で、底部がヘラ切り無調整と手持ちヘラケズリが主体という特徴がある。いっぽう甕類には平行タタキ痕の存在が特徴となる。年代としては8世紀末~9世紀初頭という年代を与えられている。伊藤が示したこのII群土器の特徴は、SI01出土土器とほぼ同様の特徴を示すと考えられる。須恵器壺に不定形ヘラケズリの痕跡が明瞭に残らないなどやや異なる点もあるものの、甕類の特徴などを総合すると、おおよそこのII群に対応すると考えられる。したがって、この住居跡はこの時期に比定されると考えられる。

また、埋土上位ではあるが、10世紀末~11世紀前半のあいだに収まると考えられる柱状高台と皿の破片が出土しており、これらは混入と考えられるものの、付近には該当する構造があるものと予想される。

2 跡呂井遺跡の遺構分布状況

跡呂井遺跡はこれまで10次以上の調査が行われてきているが、杉の堂遺跡に比べて断片的な調査が多く遺跡全体の様相は不明な点が多い。そのなかで今回堅穴住居跡が調査されたことは遺構の分布状況を判断する上では貴重な発見となる。これまでの調査では神明神社を中心とする地域に堅穴住居跡や掘立柱建物跡が発見されている。とくに、今回の調査区の南東側には多数の堅穴住居跡が発見されている。したがって、今回発見の堅穴住居跡はこれらの住居群に含まれるべきものであり、隣接地から検出されている掘立柱建物跡を含めると、これらの地域に一つの中心的なまとまりが見いだせる。

跡呂井遺跡の遺構の分布が杉の堂遺跡とどのように関連して存在するのか、時期的な変遷も含めて課題は多いが、これらは今後の調査によって徐々に明らかにされていく。

3 杉の堂遺跡出土の土器埋設遺構について

杉の堂遺跡からは土師器長胴壺2個体がそれぞれ口縁を重ね合わせた状態で発見された。いわゆる合口壺棺であるが、棺とは明確に判断できないためここでは土器埋設遺構としている。

沼山や高橋によるこれまでに岩手県内では9遺跡10基の出土例が確認されている（沼山1981、高橋1995）。これらを今回の出土例もあわせて比較してみたい。

①掘りかた

今回の出土例には掘りかたが検出されなかった。これは上部を削平によって失っているためと考えられるものの、当初よりあまり明確な掘りこみがなかった可能性がある。壺が圧縮されたとはいえある程度の高さが残存している場合においても掘りかたが確認できなかったからである。県下で発見された合口壺10基のうち2基は掘りかたが確認できないという（沼山1981、岩手埋文1982）。今回の場合と状況は類似していると思われる。壺を設置した以上何らかの掘りかたが存在するはずであるため、非常に浅いものや壺の大きさに合わせた最小限のものであった可能性が高いと考えられる。実際に他遺跡の例をみるとこういった状況を示すもの多いため上記の推測を裏づけられよう。

②出土位置

集落に近い所で単独で発見される場合が多いが、集落内でもあまり遺構が集中しない端部に多くが認められる。今回の出土例はこの傾向に合致する。

③スス

今回の出土例も含めて、量の多寡はあるもののほとんどの壺にはススが付着している。そのため実際に使用したものを転用して合口に使用していると考えられる。これまで底部や胴部を焼成後に穿孔したもののが確認されているが、杉の堂遺跡では確認できない。

④時期

合口の土師器壺 자체の年代からみると9世紀後半から10世紀前半に含まれるものが多いとされる（高橋1995）。土器の年代自体は編年研究により多少変動する要素はあるものの、なかには本遺跡出土例と同様に体部上位にタタキ痕が残る例があり、9世紀前半の特徴を示すものもある。したがって、平安期集落が一般的に存続する期間に併行して存在しているものと考えられる。

⑤分布

県内の分布状況を見ると、北上～水沢市周辺にのみ認められる。現状では非常に偏った分布をみせる。もちろん調査密度が反映していると思われるが、このような傾向が確認できる。もちろん、この合口壺（棺）は東北地方に多いものの、ひろく東日本に分布しているのであり、岩手県で完結しているわけではない。

⑥性格

このような土器埋設遺構の性格として、沼山は幼児用の土器棺と考えているもの（沼山1981）、人

骨が出土した例は皆無であり明確に判断したい。今回の出土例についても甕の内部には人骨や種子類などは発見することができなかった。

この種の遺構が特殊と考えられる特徴として、集落の外れから検出されることが多いことがある。周囲には遺構がほとんどないか、あっても非常に密度が薄い場所から発見されることが多い。この点は性格についてある程度示唆しているのかもしれない。この特殊な出土位置を重視するならば、なんらかの境界をあらわしている可能性があり、それを意識した何らかの儀式の痕跡とも考えられる。

このように様々な性格が考えられるが、これまでの発見例からは明確にその性格が判断される根拠は少なく、現状では性格は不明と言わざるを得ない。また、各地の例が同様の性格を有していたか否かも不明である。この問題はこれ以上資料の制約のため踏み込めないが、いずれ何らかの儀礼・儀式にかかわる遺構と考えられる。

以上、先学の論に準拠しつつ比較を行ったが、今回の杉の堂遺跡例はこれまで発見された例と同様のものであり、新たな資料の追加となる。

また、この種の遺構の配置状況が集落の境界付近にあることが多く、今回の遺構密度が少ないので当然ともいえる。したがって、すくなくとも平安期の集落境界の一端がこの付近にあったことが判明したことは今回の調査においては重要な成果のひとつといえよう。

4 杉の堂遺跡・跡呂井遺跡の調査成果

杉の堂遺跡では、調査の結果非常に遺構密度がうすく、わずかな遺構のみが発見された。しかしながら、県内でもめずらしい合口甕（棺）出土遺構が発見されるなど重要な遺構の発見もあった。また、この遺構の存在から杉の堂遺跡の集落境の存在も予想されることとなった。

跡呂井遺跡では、これとは逆に、調査面積の割に遺構密度が高いものとなっている。この時期には少ない、1辺が6mを超える堅穴住居跡が1軒調査された。過去の調査と比較すると、隣接地点には掘立柱建物跡が調査されるなど平安期集落の一つの中心があった部分と思われる。出土遺物は特記するものは出土しないが、ロクロ土器器の導入時期に相当する土器群と考えられる。

このように、遺構・遺物ともわずかではあるが、各遺跡は今後の研究にとって重要な成果を提供するものとなっている。

(西澤)

参考文献

- 岩手県埋蔵文化財センター 1982 「東大槻遺跡」『余ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
伊藤 博幸 1987 「杉の堂坂口遺跡」『水沢遺跡群範囲確認調査昭和61年度発掘調査概報』水沢市教育委員会
伊藤 博幸 1990 「熊之堂遺跡」『水沢遺跡群範囲確認調査概報、平成元年度』水沢市教育委員会 21集
菅原祥大 1988 「伊治城跡一昭和62年度発掘調査概報」『篠町文化財調査報告書第1集』
高橋 千晶 1995 「岩手県『東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—』第5回東日本埋蔵文化財研究会
沼山源義治 1981 「土師器合口甕塗舞について—東日本における諸例を中心として—」『考古学雑誌』66-4
宮城県多賀城跡調査研究所 1989 「伊治城跡II」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊

写 真 図 版

1 B区調査前風景①



2 B区調査前風景②



3 B区基本層序



写真図版 1



1 B区試掘トレンチ



2 B区調査後全景（北から）



3 B区調査後全景（南から）

写真図版 2

1 A区調査後全景(西から)



2 A区調査後全景(北西から)



3 A区調査後全景(西から)

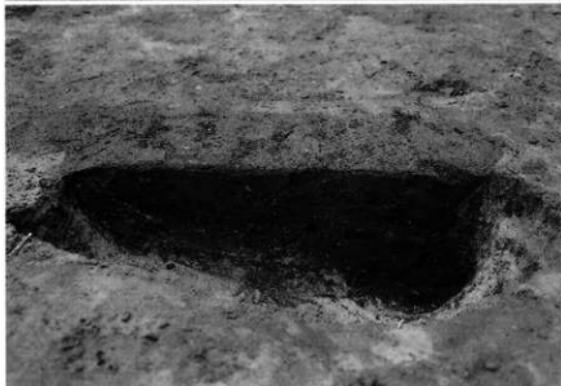


写真図版 3

1 A区 SK01 埋土断面



2 A区 SK04 埋土断面



3 A区 SK05 埋土断面



1 A区 SK06 墓土断面



2 A区 SK07 墓土断面



3 B区 SK08 质化物出土状况



1 B区 SX01 遗物出土状况①



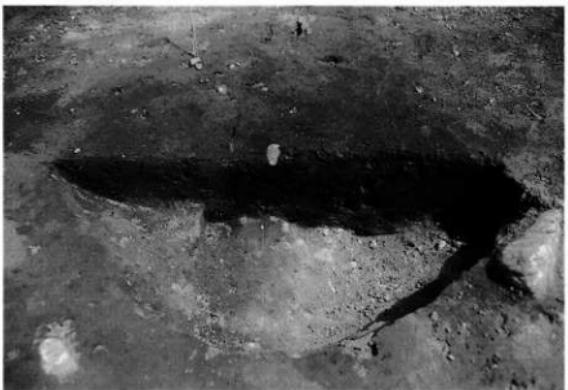
2 B区 SX01 遗物出土状况②



3 B区 SX01 遗物出土状况③



1 B区SK11埋土断面



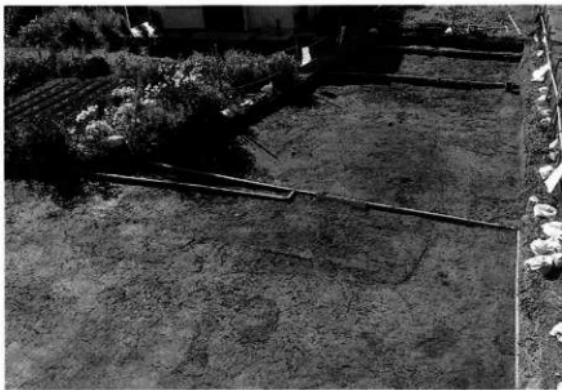
2 B区SK12壳损状况



3 B区SK20埋土断面



1 D区SI01検出状況



2 D区SI01完掘状況①



3 D区SI01完掘状況②



写真図版 8

1 D区S101埋土断面①



2 D区S101埋土断面②



3 D区S101埋土断面③



1 D区S101 土坑檢出狀況



2 D区S101 遺物出土狀況①



3 D区S101 遺物出土狀況②



1 D区SI01カマド①



2 D区SI01カマド②



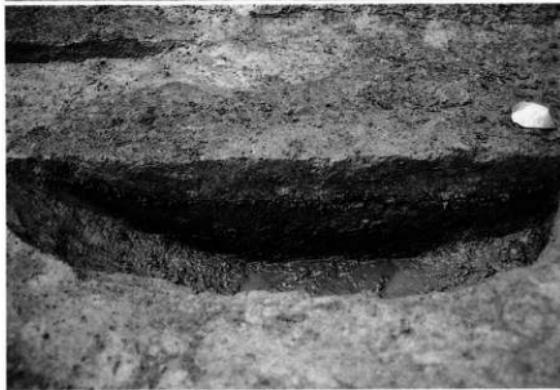
3 D区SI01カマド③



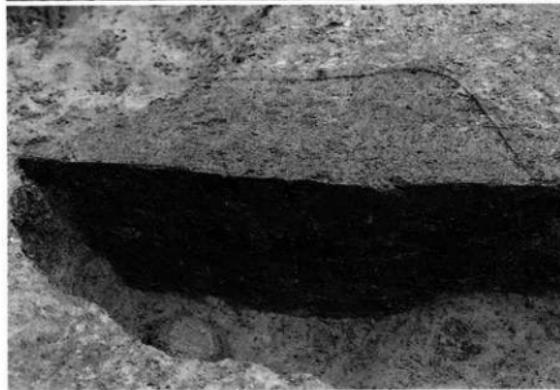
1 D区S101土坑5埋土断面



2 D区S101土坑4埋土断面



3 D区S101土坑10埋土断面



写真図版 12

1 D区S101壁柱穴



2 D区調査風景



3 D区現地公開風景



1 D区SK15完掘状况



2 D区SK17埋土断面



3 D区SK18埋土断面





18



2



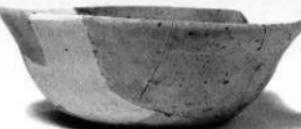
1



8



5



9



10



12



6



11

写真図版 15 D区SI01 出土遺物①



13



26



4



24



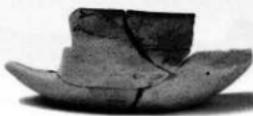
7



27



14



25



3

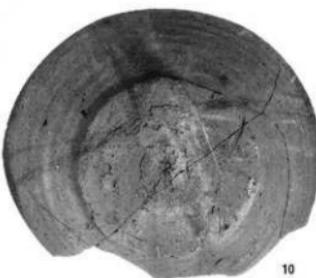


33

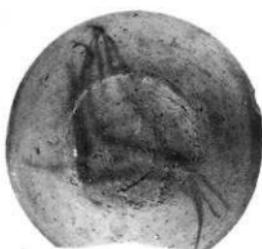
写真図版 16 D区S101 出土遺物②



18



10



1



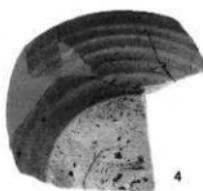
2



5



9



4



14

写真図版 17 D区SI01 出土遺物③



29



31



53



19



28



15



54



30



55



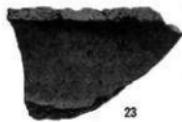
16



20



17



23



21



22

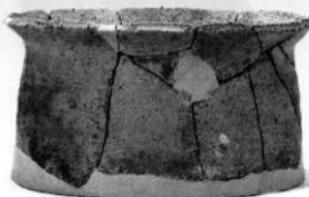
写真図版 18 D区SI01 出土遺物④



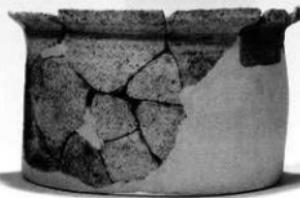
52



51



46



49



42

写真図版 19 D区SI 01 出土遺物⑤



47



45



43



50



41



38



44



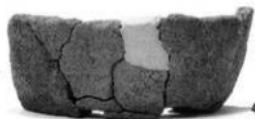
48



39

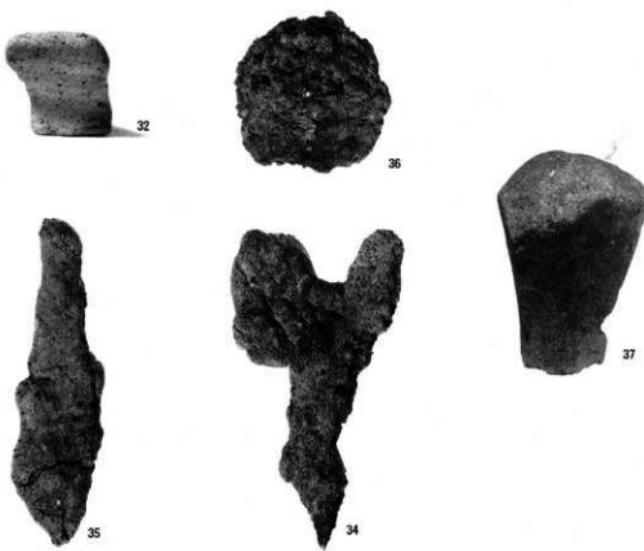
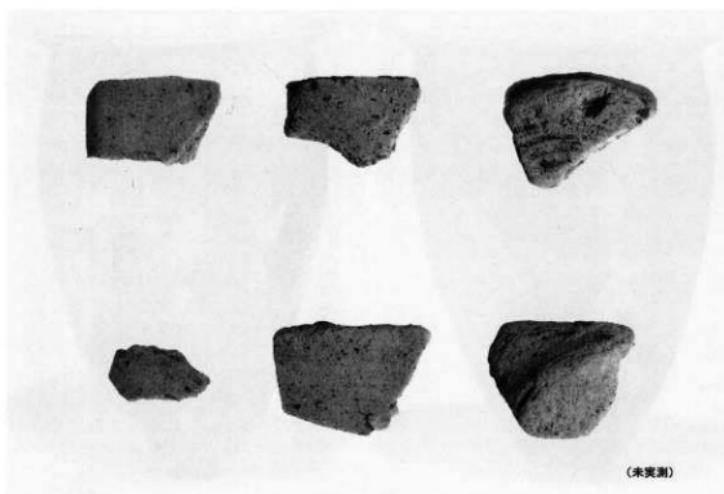


40



46

写真図版 20 D区SI01 出土遺物⑥



写真図版 21 D区SI01 出土遺物⑦



1

2



3

4



6



7

5

写真図版 22 A区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すぎのどういせきだいさんじゅういちじちょうさ・あとろいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	杉の堂遺跡第31次調査・跡呂井遺跡発掘調査報告書						
調査名	国道4号水沢東バイパス建設事業関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第473集						
編著者名	川又吾・西澤正晴						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL(019)638-9001						
発行年月日	2006年2月28日						
ふりがな	ふりがな	コード	北, 東, 西, 南	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
杉の堂遺跡 第31次調査	岩手県水沢市東中 通り二丁目123-2 ほか	03204	NE 27- 0100 08分 21秒	39度 141度 09分 04秒	2004.08.19 ~ 2004.10.15	5,318m ²	国道4号水沢東バイ バス建設事業に伴う 緊急発掘調査
跡呂井遺跡	岩手県水沢市神明 町一丁目84-3ほか	03204	NE 17- 2057			185m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
杉の堂遺跡 第31次調査	集落	縄文時代 平安時代 時期不明	土坑1基 土器埋設遺構1基 土坑15基 ビット37個	縄文土器・石器 土師器 須恵器			
跡呂井遺跡	集落	平安時代 時期不明	堅穴住跡1棟 土坑4基 ビット11個	土師器 須恵器 柱状高台 鐵礫 紡錘土	「門家」の墨吉 土器		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第473集
杉の堂遺跡第31次調査・跡呂井遺跡発掘調査報告書

国道4号水沢東バイパス建設事業関連遺跡発掘調査報告書

印 刷 平成18年2月22日

発 行 平成18年2月28日

発 行 務岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田11地割185番地
電 話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 内海印刷
営業部兼所 〒020-0875 岩手県盛岡市清水町8-8-108
電 話 (019) 622-0288
本 社 〒026-0041 岩手県釜石市上中島町4-2-4
電 話 (0193) 23-5511

